

第5章 第三期—絵本評論の本格化 (1969～1990年)

1. 翻訳

(1) 『ガンピーさんのふなあそび』(1976)

① 絵本翻訳における“原書主義”の普及

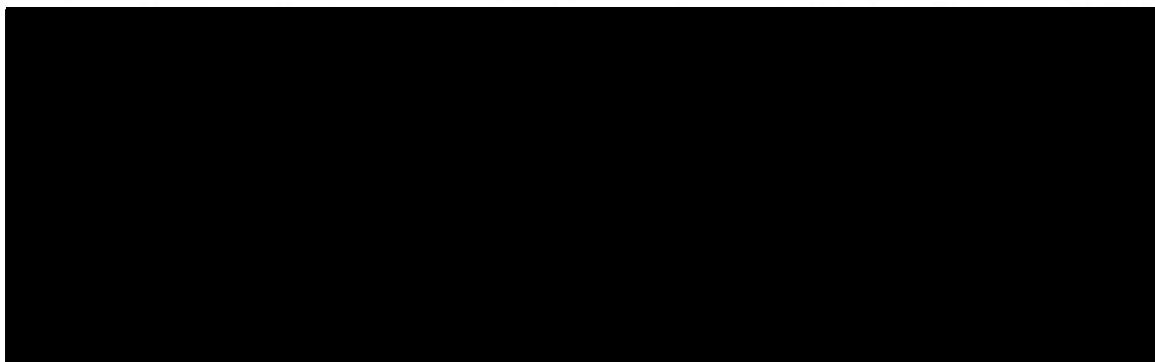


図1 翻訳本『ガンピーさんのふなあそび』

図2 原書 *MR. GUMPY'S OUTING*

『ガンピーさんのふなあそび』

ジョン・バーニンガム作、光吉夏弥訳 ほるぷ出版 1976年

MR. GUMPY'S OUTING

John Burningham Jonathan Cape 1970

翻訳本『ガンピーさんのふなあそび』(図1)は、原書 *MR. GUMPY'S OUTING* (図2) を左開き横組みのままの形で再現している。〈岩波の子どもの本〉での海外絵本の翻訳では“左開き横組み”の原書は、“右開き縦組み”に再編集されていた。しかし、この絵本は原書どおりの“左開き横組み”で翻訳がおこなわれている。したがって、この『ガンピーさんのふなあそび』については、絵は逆版等の翻訳上の操作はおこなわれていないため、ここでは翻訳方法は検討しない。

〈岩波の子どもの本〉の絵本づくりに触発された多くの後続出版社は、1960年代初頭から翻訳絵本の出版に取り掛かった。〈岩波の子どもの本〉の翻訳絵本でおこなわれたレイアウトの改変を反面教師に、1960年代の翻訳絵本は原書に忠実に翻訳された。日本語を横書きにすることに関しても、違和感なく受け入れられる時代が到来していた。海外絵本の“左開き横組み”のレイアウトが尊重される翻訳形態、つまり“原書主義”に即した翻訳方法である。

つまり、『ガンピーさんのふなあそび』は原書主義に則って翻訳された絵本である。

② ジョン・バーニンガムの発掘

原書 *MR. GUMPY'S OUTING* は、本国イギリスでは1970年に出版されている。日本での

翻訳本『ガンピーさんのふなあそび』は、1976年という原書の出版から比較的早い時期に翻訳されている。『ガンピーさんのふなあそび』はバーニンガムの絵本のなかでは、日本ではじめて訳されたものである。この時期の児童書翻訳は、翻訳者などからの持ち込みが多かったことから、光吉の持ち込みで出版されたものと推測される。

光吉は戦前から海外の作家・画家と作品に関する情報を集め、それをカード整理していたことが確認されている。MR. GUMPY'S OUTINGのほるぷ出版への持ち込みは、光吉の徹底した情報収集と審美眼による選書だったと考えられる。

③ 絵本作家ジョン・バーニンガムと MR. GUMPY'S OUTING の評価

[あらすじ]

ある河辺にガンピーさんという男が住んでいる。ガンピーさんは舟を1そう持っている。ある日ガンピーさんは舟にのって出かけると、子どもが二人「いっしょにつれてって」と頼んできた。「いいとも、けんかさえしなけりゃね」と快くガンピーさんは子どもたちを舟に乗せてやる。つぎにうさぎが、やはり舟に乗せてほしいと頼むので、「いいとも。とんだりはねたりしなけりゃね」と乗せてやる。それから、ねこ、いぬ、ぶた、ひつじ、にわとり、こうし、やぎも乗りこむ。けれど、それぞれガンピーさんと約束したことを忘れ、ふねのうえで飛んだり跳ねたり、ケンカをしたり、どしんどしん暴れたり……ついには、舟はひっくり返って、みんな川の中に落ちてしまう。ぬれた身体をみんなが河原でおひさまにあたって乾かして、お茶の時間のために野原を横切って歩いてガンピーさんの家に帰る。そしてのんびりとお茶会を楽しむという幸せな結末を迎える。

ジョン・バーニンガムは、現代イギリスを代表する絵本作家である¹。バーニンガムは1963年に初めて出版した絵本、*Borka: The Adventures of Goose No Feathers* (『ボルカはねなしガチョウのぼうけん』²) でケイト・グリーンナウェイ賞を受賞した。ケイト・グリーンナウェイ賞 (Kate Greenaway Medal) は、イギリスの絵本作家ケイト・グリーンナウェイにちなんで、1956年に英国図書館協会によって設立された賞である。一年間にイギリスで出版された絵本のうち、特に優れたものの画家に対して贈られる。アメリカのコールドコット賞に相当する絵本賞である。

MR. GUMPY'S OUTINGはバーニンガムの初期作品であるが、彼はこの作品で2度目のケイト・グリーンナウェイ賞を受賞した。同年、ニューヨーク・タイムズ年間ベスト絵本賞、及びブラティスラヴァ世界絵本原画展のオナラリー・アワードを受賞している。1973年には、この作品でボストン・グローブ・ホーンブック賞イラスト部門賞を受賞している。

3

作品評価を以下に述べる。物語の構造は民話に特有の「積み上げ」の構造をもっており、牧歌的な雰囲気なたたえている。どこかユーモアがあり、線の美しい絵が印象的な、素朴で味わい深い絵本である。子どもたちに読むと、結末が分かっているのに、かならず何度も読んでとせがまれる絵本である。とくに舟がひっくり返るくだりなどは、大好きな子どもが多い。ガンピーさんののん気さ、動物たちのあまりかしこそうに見えない個性豊かな表情、ストーリーの展開など、子どもの本の王道といえる魅力を備えた絵本である。

ブライアン・オルダーソンは、バーニンガム作家作品の研究を手掛ける、世界を代表する絵本研究者である。オルダーソンは、*MR. GUMPY'S OUTING*を「羽が生えて空から降ってきたかのような傑作」と称している。以下、オルダーソンの作品評価を引用してみる。⁴

まず言えることは、この作品は積み上げ話を作る際の、場面の完ぺきな配分というものを見せてくれる。つぎつぎにみんなが舟に乗りこんでくる、それから（期待どおりに）大災難が起こる。そして満足感のあるしめくくりを迎える。もうひとつ言えることは、この本は（中略）バーニンガムの絵本作りには、新しい可能性があることを気づかせてくれる。

作品を高く評価し、絵本表現の新たな可能性さえ感じさせる作品だと述べている。さらに、オルダーソンは絵本作家バーニンガムについて、次のように批評している。

当時、芸術の世界全般に、伝統に縛られまいとする動きが広がっていたが、これと連動して、子どもの本の世界にも新しい流れが起こっていた。この動きは、新しい世代の親や教師、司書、書店、それに出版社に喜んで迎え入れられた。いっぽうで、多色印刷技術が発達したために、特に絵本に関しては、作家が原画を制作するときの自由度が増した。また、国際市場の成長に伴って、出版部数も大きく増えていた。（中略）

そういうわけで『ボルカ』は、英国の若手絵本作家たちが「新しいもの」を生み出す機会を得て描いた絵本の一冊だった。彼らのオリジナリティは、新しい市場を開拓したがっていた出版社の目をひいた。（オリジナリティについては、『ボルカ』が前年に出版された「もっとも優れた絵本」として1964年度のケイト・グリーンナウェイ賞に輝いたと記録しておけば、おわかりいただけるだろう。この賞は1961年度には、フィリパ・ピアスの『コックルおぼさんとねこ』の挿絵を描いたアントニー・メイトランド、1962年には、『ブライアン・ワイルドスミスのABC』の作者ブライアン・ワイルドスミスと、若手イラストレーターが受賞しており、バーニンガムは、彼らに続いての受賞だった。子どもの本の司書たちはしばしば、定評ある過去の作品にしか目を向けられない傾向が見受けられるが、これらの絵本作家たちが、この図書館協会主催の賞を受賞したことは、今や司書たちも挑戦と変化を奨励する側にまわったということだ）。

とはいえ、バーニンガムとメイトランドとブライアン・ワイルドスミスがそろって、絵本の「新スタイル」を樹立したというようなことではない。当然ながらこの3人はそれぞれに、当時の若手作家が享受していた自由を体現している。それぞれが独自のスタイルを確立し、大胆すぎるほど色彩を強調した絵を描いている。まるで新しいカラー・リトグラフ印刷が、色彩をどこまで正確に印刷できるものか、その可能性に挑戦しているかのようだ。（中略）

絵本について語るときにはついつい、絵本作家が何を絵にし、何を絵にしなかったのかという点ばかりに着目してしまいがちだ。だから早い段階で強調しておこう。ジョン・バーニンガムのほとんど全ての作品は、文章も彼自身が書いている。自分の文

章を自分が絵で表現したのが、彼の絵本なのだ。

オルダーソンは、イギリスの子どもの本の研究の泰斗である。歴史研究を中心に、出版はもとより、書評、再話、展覧会の企画など幅広く活躍する。彼は「子どもの本歴史協会」の創立者でもあり、世界でも数少ない児童文学・絵本の史家である。

オルダーソンはバーニンガムを新しい時代を象徴する作家としている。もちろん、上記の評価は2005年時点のオルダーソンの評価である。

バーニンガムの初期作品しかまだ出ていなかった1976年時点で、光吉がバーニンガム絵本の新しさとおもしろさに着眼し、翻訳しようとしたことは、彼の先見性をうかがわせる。

③ 光吉の選書の根拠となるもの——情報カードの発掘

では光吉がバーニンガムの国際的評価、及び作家の評価、どのように調査していたのか、光吉文庫所蔵の情報整理カードから考察した。白百合女子大学児童文化研究センター光吉文庫には、光吉の手製の情報カードがまとめられている。この情報カードは、戦前から集積されたものである。

光吉は1943年に発表した「翻訳者の反省」(『少国民文化』日本少国民文化協会 1943年1月)において、「僕は自分の参考のために、明治以来の海外の児童読物の翻訳年表と、作者別の作品カードを作つてゐる。これをみると、どういふ作家の、どういふ作品が、いつの時代にどういふ風に移植されたか、さらに今どうなつてゐるかなどのいろいろな点がうかゞへて、今日までの海外児童文学のありかたが展望されるのである」と記しているように、独自の資料を作成していた。

光吉文庫を管理する白百合女子大学児童文化研究センターの関係者さえ、ケースに入ったこの膨大な情報カードが、何を意味するものなのかわからなかったという。しかし筆者による鳥越信、澤田精一、みつじまちこへのインタビューから、この資料が何を意味するものなのかが解明された。

調査の結果、これらの情報カードは児童文学作家、絵本作家・画家などの情報をまとめたものだということが明らかになった。情報カードは2種類に大別されていて、ひとつは作家別にまとめられた作品のリスト(邦訳情報を含む)、もうひとつは作家・画家別にまとめられた書評や研究文献のリストであることも判明した。

図3及び図4は、ジョン・バーニンガムについての情報カードである。図3は作家の作品リスト3枚、図4は作家・作品に関する書評、研究文献のリストである。

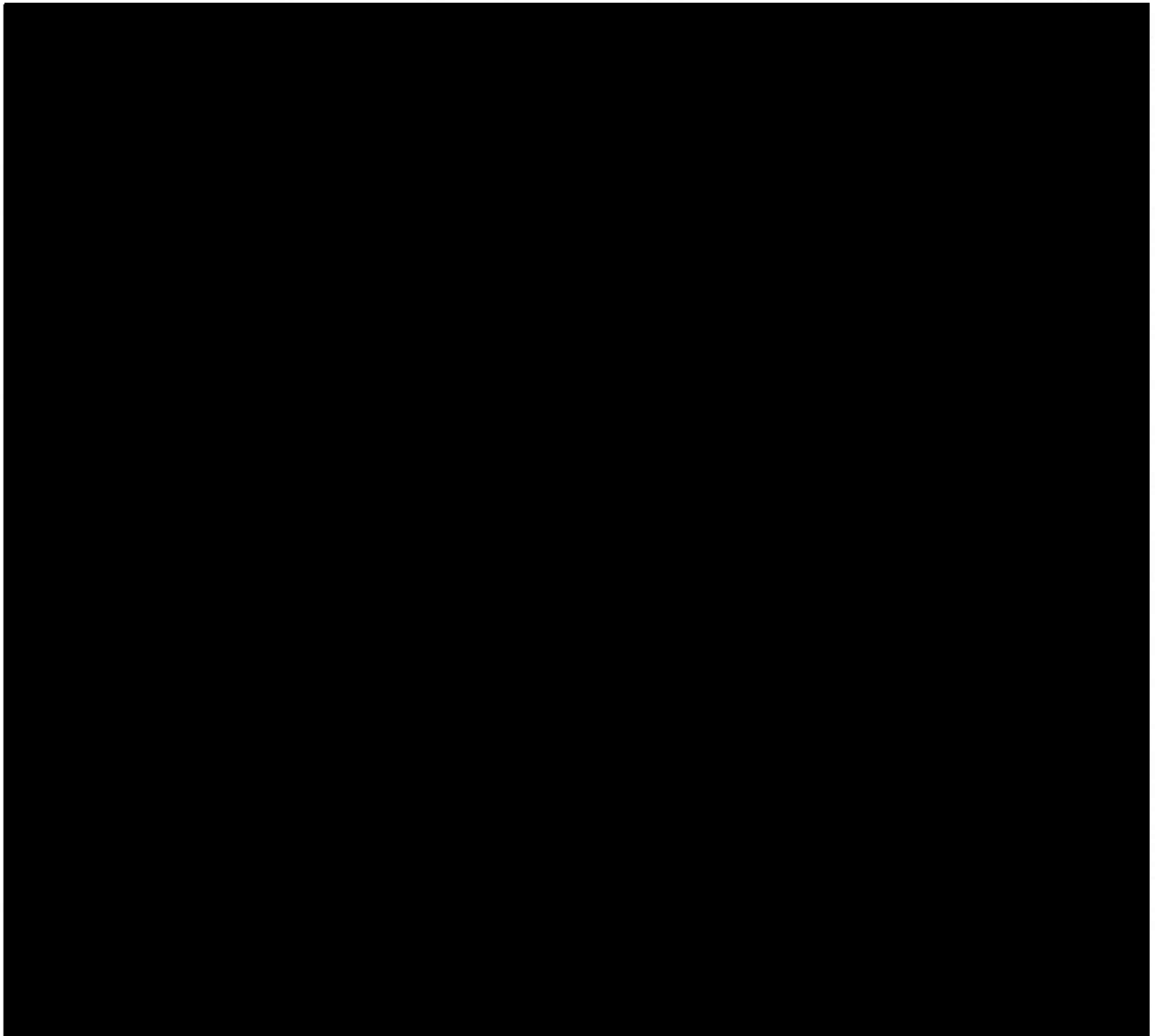


図3 バーニンガムの作品リストのカード3枚（左：表面・右：裏面）

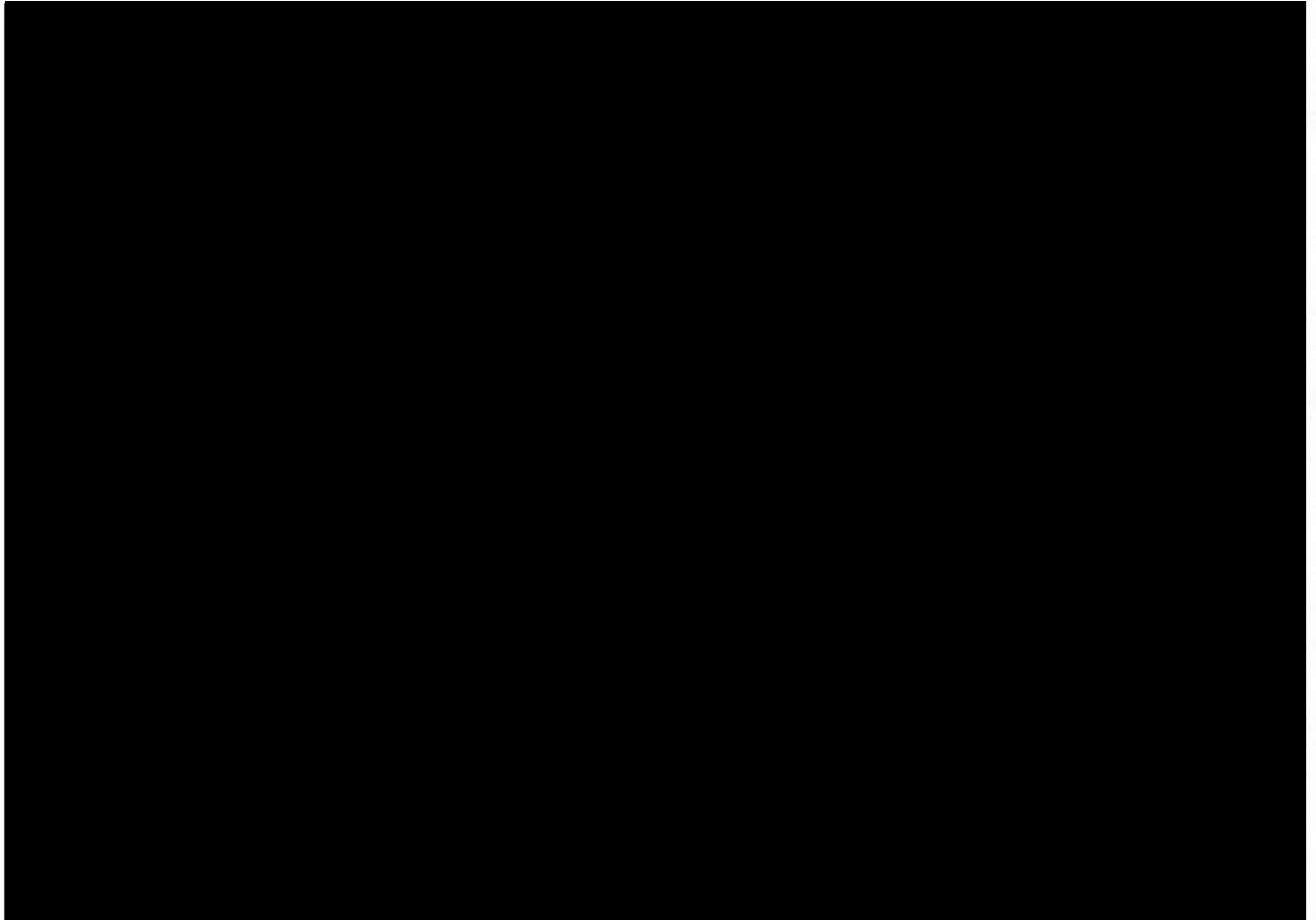


図4 バーニンガム作家作品の書評、研究文献リストのカード2枚
(左：表面・右：裏面)

2種の情報カードを検討した結果、光吉はカードにタイプライターで情報を打ち込み、次々に出版される作品や雑誌や新聞の書評、研究書をもとに、随時、情報を追加していたことが明らかになった。また新たな情報を得るたびに、カードに記載された情報を見直して修正を加えていることもわかった。情報カードに見られる手書きの文字が、加筆修正の痕跡である。筆者が確認したところ、ほぼ全てにこの丁寧な書き込みがあった。光吉が長年にわたって、膨大な量の情報カードを作りつづけ、しかも新たな情報が入るたびに加筆修正して、情報を整理していたことが分かる。

バーニンガムの『ガンピーさんのふなあそび』に関しては1976年までの情報しか記載されていなかったはずであるが、この情報カードをもとに、光吉が選書をおこなっていたことが証明できた。光吉はバーニンガムの作品群すべてに目を通したうえで、*MR. GUMPY'S SOUTING*を選んだであろう。そしてバーニンガムの受賞歴を含めた作家としての評価や、*MR. GUMPY'S SOUTING*の絵本表現と物語性、子どもにふさわしいテーマなのかを厳しく吟味したと思われる。

まとめると、光吉は作家・作品を評価する際に、時代の縦軸、横軸をいう視点をもっていた。縦軸とは、つまり絵本の歴史のなかでこの絵本がどう評価できるかという視点、そして横軸とは、同時代に活躍する作家・画家、出版されている作品のなかでこの絵本がどう評価できるかという視点である。

(2) 『大きいツリー小さいツリー』(1977)

① 光吉の幼年童話分野での業績

光吉はおもに絵本、児童文学の翻訳分野で活躍したが、幼年童話においても大きな足跡を残した。大日本図書での〈ゆかいなゆかいなおはなし〉シリーズ(全20冊 1977～1984年)、〈ぼくはめいたんてい〉シリーズ⁵(全6冊 1982年)が代表的な仕事である。

幼年童話⁶というジャンルは、児童文学のなかでも特に幼児期から小学校低学年までくらの子どもを対象とした読物を指す。書籍の形式としては、文字も大きく、挿絵も多い、どちらかといえば絵本に限りなく近く、少し長めの物語が収録されるものである。また、読み聞かせをするというよりも、一人読みをする子どもを想定して作られたものが多い。絵本から読み物である児童文学に移行する時期に読む物としてふさわしい体裁、内容になっている。絵本から児童文学への移行期に位置することから、幼年童話は子どもが自分で読める文学の入り口になるジャンルである。

② 大日本図書〈ゆかいなゆかいなおはなし〉シリーズ

大日本図書の〈ゆかいなゆかいなおはなし〉シリーズは、20冊のうち17冊が光吉の翻訳、3冊は光吉郁子⁷の翻訳である。国内外の民話、絵本、児童文学から、とくに幼い子どもにふさわしい作品を選び、編集・翻訳した叢書である。このシリーズを担当した大日本図書の編集者が既に他界しているため詳細は不明であったが、同出版社の現在の児童書編集者に問い合わせたところ⁸、このシリーズに関しては企画段階から光吉が関わっていたのではないかということであった。このシリーズには、光吉がそれまでに他出版社で翻訳した作品も含まれていたため、選書に関しては光吉の意向が尊重されたと考えられる。

以下に〈ゆかいなゆかいなおはなし〉シリーズのうち、光吉が翻訳した17作品を挙げる。

『しろいいぬ?くろいいぬ?』

マリオン・ベルデン・クック作、光吉夏弥訳、池田龍雄絵 大日本図書 1977. 07. 05

『“なんでもふたつ”さん』

W. S. クラッチ作、光吉夏弥訳、クルト・ビーゼ絵、太田大八装幀 大日本図書 1977. 07. 30

『だんごをなくしたおばあさん』

小泉八雲作、光吉夏弥訳、平山英三絵、平山英三・久住和代装幀 大日本図書 1977. 09. 30

『あべこべものがたり』

北欧民話、光吉夏弥訳、箕田源二郎絵 大日本図書 1977. 09. 30

『大きいツリー小さいツリー』

ロバート・バリー作、光吉夏弥訳 大日本図書 1977. 11. 10

『うさぎがいっぱい』

ペギー・パリシュ作、光吉夏弥訳、エオナード・ケスラー絵 大日本図書 1978. 03. 31

『トミーは大いそぎ』

- ヘレン・パーマー作、光吉夏弥訳、赤坂三好絵 大日本図書 1978. 05. 10
『王さまのアイスクリーム』
フランセス・ステリット文、光吉夏弥訳、土方重巳絵 大日本図書 1978. 10. 30
『ともだちができた！』
セラ・アシャロン文、光吉夏弥訳、スーザン・パール絵 大日本図書 1978. 10. 31
『ちびっこ大せんしゅ』
シド・ホフ文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書 1979. 07. 15
『おとこの子とおもっていた犬』
コーラ・アネット作、ウォルター・ロレイン絵 光吉夏弥訳 大日本図書
1979. 08. 31
『でっかいねずみとちっちゃなライオン』
イブ・タイタス文、光吉夏弥訳、レオナード・ワイズガード絵 大日本図書
1979. 12. 15
『ねことバイオリン』
タマラ・キット文、光吉夏弥訳、ウィリアム・ラッセル絵 大日本図書 1980. 09. 30
『ねこはやっぱりねこがいい』
ヘレン・ヒル文、光吉夏弥訳、かみやしん絵 大日本図書 1983. 02. 28
『とらとおじいさん』
アルビン・トレセルト文、光吉夏弥訳、アルバート・アキノ絵 大日本図書
1983. 02. 28
『わにのはいた』
マーガリット・ドリアン文と絵、光吉夏弥訳 大日本図書 1983. 02. 28
『クリスマスってなんなの？』
ヘレン・モンセル作、光吉夏弥訳、津田櫓冬絵 大日本図書 1984. 11. 30

③ 『大きいツリー小さいツリー』の翻訳

この〈ゆかいなゆかいなおはなし〉シリーズの1冊に『大きいツリー小さいツリー』（図5）がある。『大きいツリー小さいツリー』の原書は、アメリカで1963年に出版された絵本 *Mr. Willowby's Christmas Tree*（図6）であった。原書は絵本として出版されているが、『大きいツリー小さいツリー』はそれを読み物シリーズの判型にはめ込み、翻訳したものである。図6の原書 *Mr. Willowby's Christmas Tree* は光吉文庫所蔵の絵本の表紙である。本来あったカバーが取れてしまっていると考えられる。

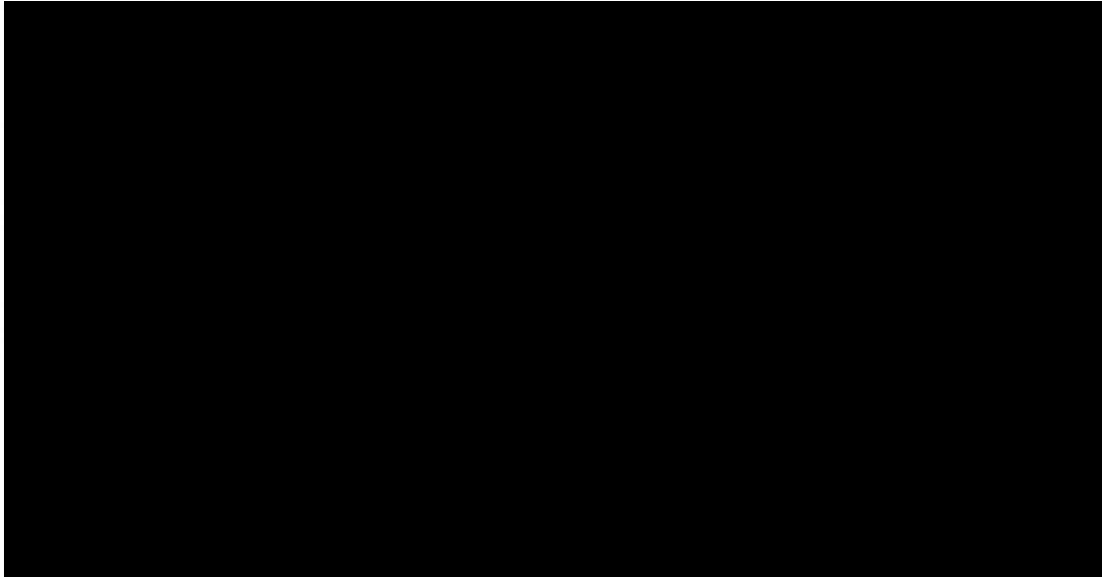


図5 『大きいツリー小さいツリー』

図6 *Mr. Willowby's Christmas Tree*

『大きいツリー小さいツリー』〈ゆかいなゆかいなおはなし〉
ロバート・バリー作、光吉夏弥訳 大日本図書 1977年

1963年にアメリカで出版された *Mr. Willowby's Christmas Tree* は、黒と緑の2色刷りの絵本である。光吉の翻訳した『大きいツリー小さいツリー』も黒と緑の2色刷りの絵を採用している。*Mr. Willowby's Christmas Tree* は、現在アメリカでもロングセラーを誇るクリスマス絵本として人気が高い。この本がよく売れたことから、アメリカでは黒と緑の2色刷りの絵本の絵を変えて、2000年にフルカラー版(図7)を出版した。このことから、大日本図書も同年2000年にカラー刷りの絵本『おおきいツリーちいさいツリー』(図8)にして翻訳出版した。現在は、本国アメリカでも日本でも、フルカラーの絵本として楽しまれている。

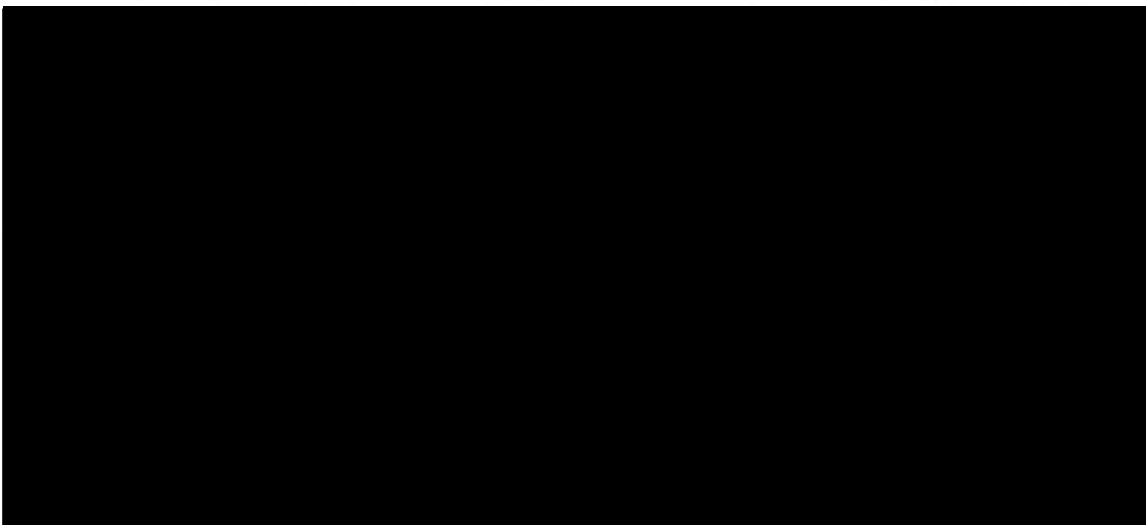


図7 *Mr. Willowby's Christmas Tree*



図8 『おおきいツリーちいさいツリー』

本研究では、光吉文庫に所蔵された原書 *Mr. Willowby's Christmas Tree* と、大日本図書〈ゆかいなゆかいなおはなし〉版を比較して、光吉が『大きいツリー小さいツリー』をどのように翻訳したのかを検討する。

④ 『大きいツリー小さいツリー』のあらすじと評価

[あらすじ]

もうすぐクリスマス。ウィロビーさんのお屋敷には、大きなモミの木が届く。待ちかねていたウィロビーさんは、さっそく広間にツリーを置いてみるが、どうやら少し大きい。そこで執事がツリーのでっぺんを切り落とし、ちょうどよい大きさに整える。切り落としたツリーのでっぺんは、小間使いのアデレードに贈られる。しかしアデレードの部屋にも大きすぎるので、さきを切り落としてゴミ箱に捨てる。アデレードが捨てたツリーのでっぺんを見つけた庭師のチムは、自分の家にちょうどいいツリーだと喜んで家に持ち帰る。けれどチムの家にもやっぱり大きすぎるツリー。チムの奥さんは、先をちょんぎって窓から捨てる。それを見つけたクマ、次にキツネ、ウサギ。それぞれの家で、ちょうどよい大きさに整え、クリスマスツリーを喜ぶ。さいごのでっぺんを小さなネズミがみつけて、家に持ち帰るとちょうどよい大きさだった。ウィロビーさんのお屋敷の大きいツリーも、そしてネズミの家の小さいツリーも、さまざまな大きさのツリーがみなにクリスマスの喜びを与えてくれる。

この絵本はロバート・バリーの創作であるが、民話にみられる段階構造を持つ物語として描かれる。ツリーをめぐる、次々に登場する人々の個性を表現力豊かに描いている。絵本の最終場面でウィロビーさんの大きなお屋敷の大広間の大きなツリーと、ウィロビーさんの家の壁の穴に住むネズミの小さなツリーの対比が面白い。マンガ風でユーモラスな絵、曲線の美しさが印象的な絵本である。子どもたちに読みつがれる魅力を、物語も絵も備えているといえる。

⑤ 『大きいツリー小さいツリー』における翻訳方法の検討

先述したとおり、『大きいツリー小さいツリー』はもともと絵本である *Mr. Willowby's Christmas Tree* を、幼い子どもの読物の体裁にするため、原書のレイアウトを変えて、絵を分解し、再構成している。下の図9は、原書と翻訳本の扉、第1場面、第2場面の進行方向を分かるように並べたものである。なお、矢印→は絵本の進行方向を示している。

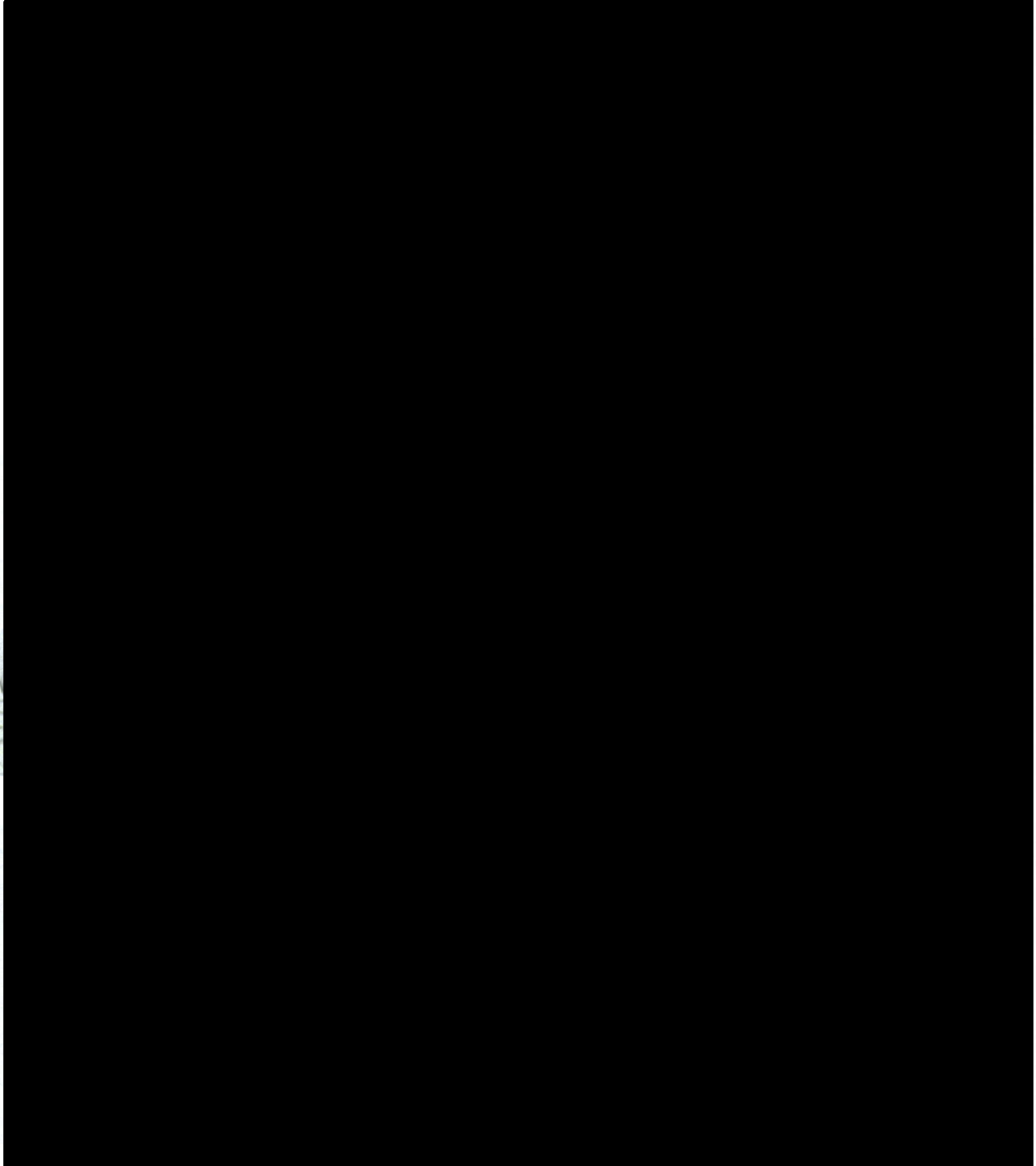


図9 原書と翻訳本の扉、第1場面、第2場面の比較

『ガンピーさんのふなあそび』で述べたとおり、絵本の翻訳においては原書に忠実にレイアウトを変えずに絵本翻訳する時代が到来していた。『大きいツリー小さいツリー』

は、読み物というフォーマットに入れ込むことから、左開き横組みの原書を、右開き縦組みにしている。図 9 の扉は原書を正版に、第 1 場面、第 2 場面は絵本の進行方向に合わせて、逆版にしている。

⑥ 翻訳本における逆版箇所を検討——絵を再構成する方法

また図 10、図 11、図 12 のように原書の絵を分解し再構成する方法が採られている。その際には、絵本の進行方向に合わせて翻訳本では逆版にしてある箇所が多い。原書でひとつの見開き描かれている絵を、翻訳本では複数の見開きにわたって再構成している。

図 10 と図 11 では原書の 1 見開きを、翻訳本の 2 見開きに再構成している箇所を、図 12 では原書の 1 見開きの絵を、翻訳本の 3 見開きに再構成している箇所を図示した。

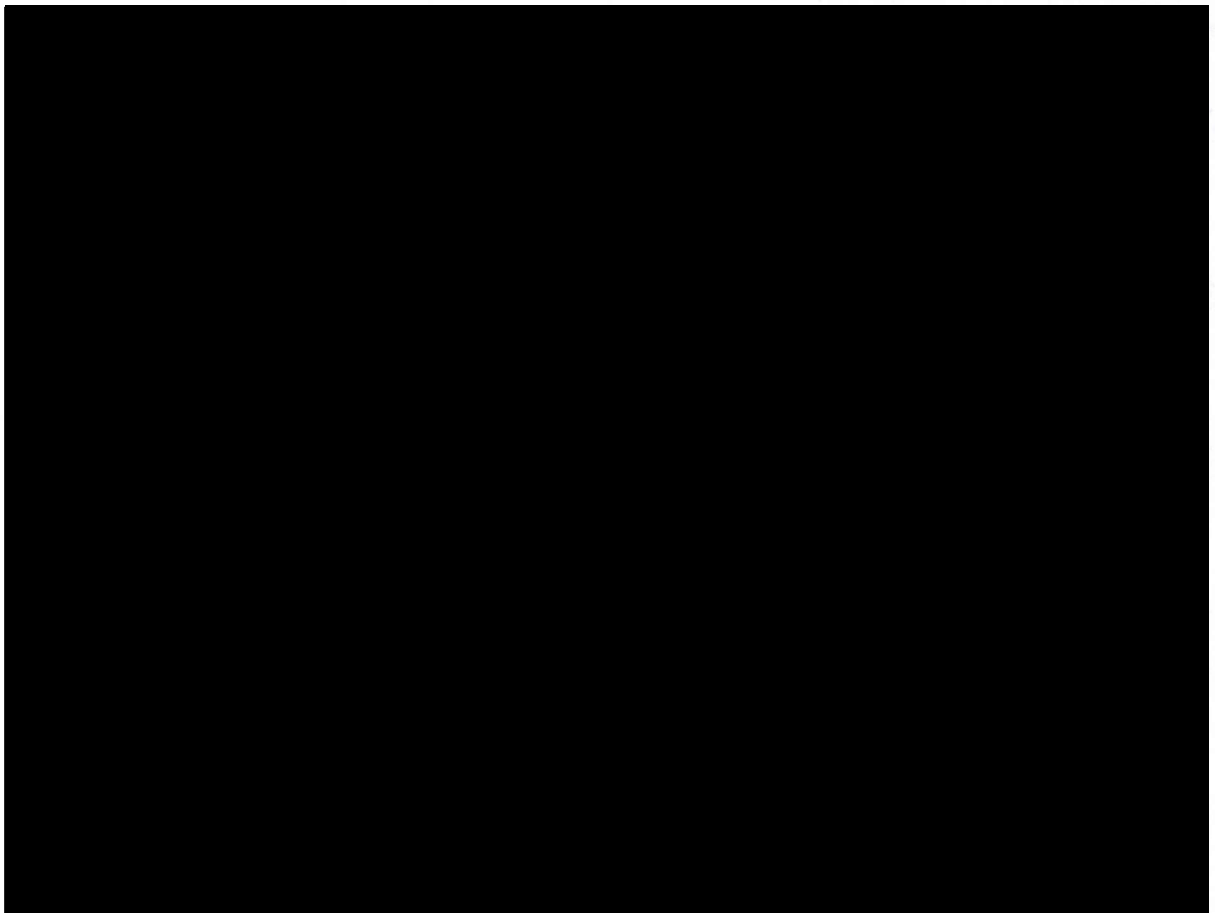


図 10 原書の絵を分解し再構成する方法 (1)

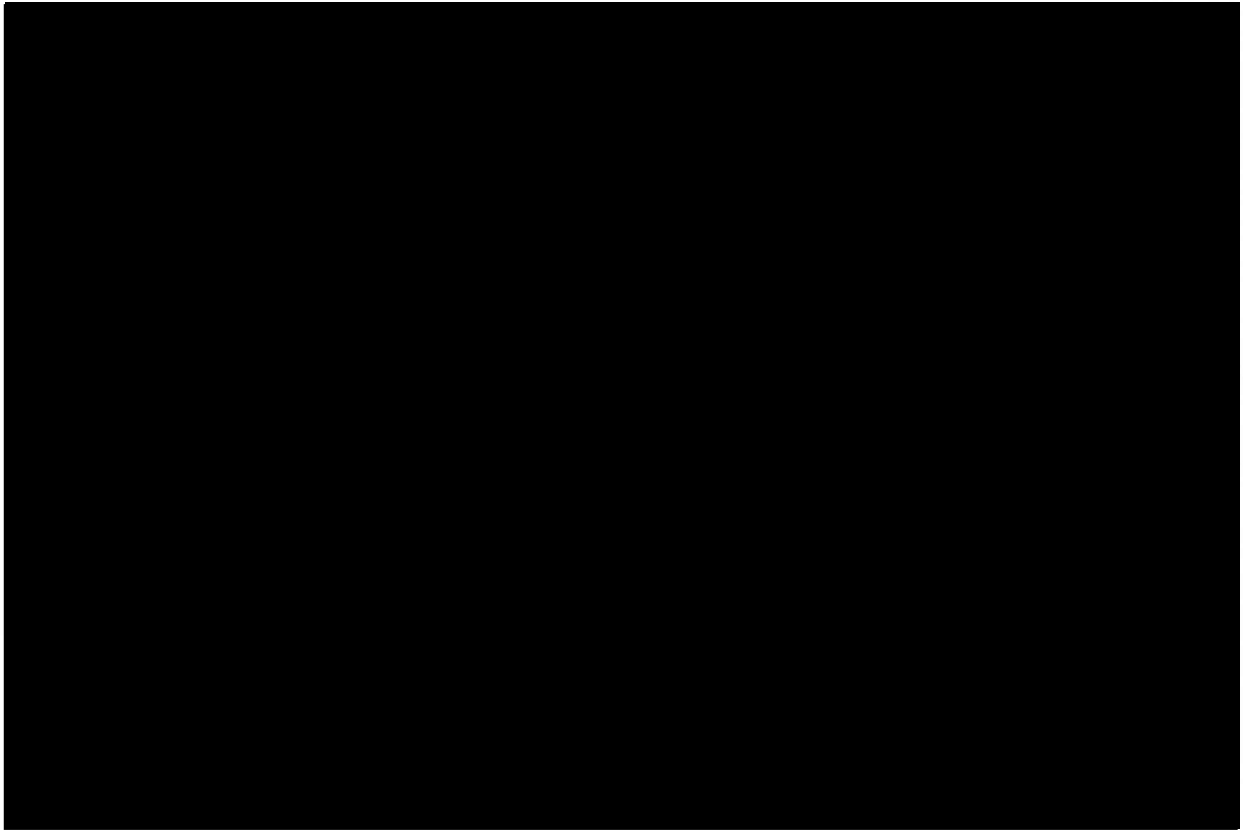


図 11 原書の絵を分解し再構成する方法 (2)

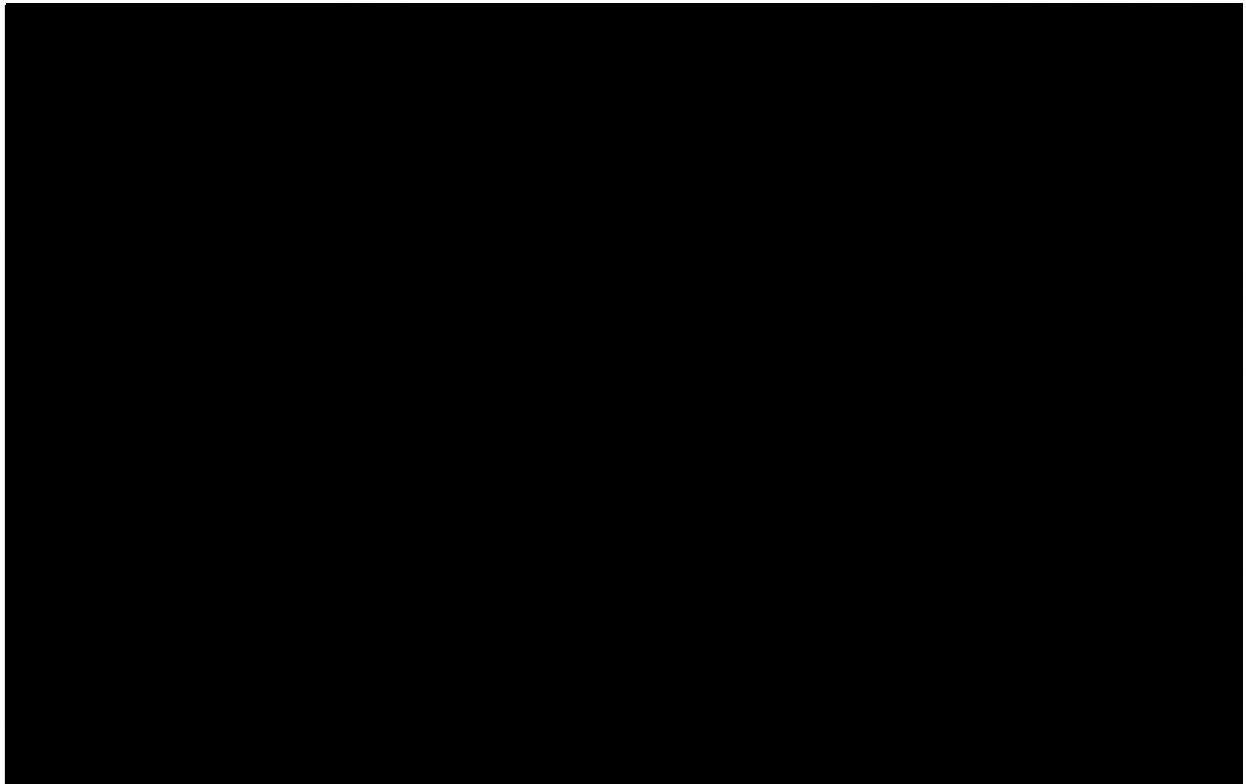


図 12 原書の絵を分解し再構成する方法 (3)

ここでは原書の絵を、見開きに描かれた絵をひとつのまとまりとして考える。逆版箇所を検討した結果、原書の絵が 17 あるうち、上の図 10、図 11、図 12 のように原書の絵

を分解し再構成した箇所が 10 箇所あることがわかった。絵を逆版にした箇所は、小さな絵を含めて、17 箇所あることが明らかになった。

ただし、この検討で留意すべき点がある。それは、原書の *Mr. Willowby's Christmas Tree* においてはひとつの見開きに異時同図を使い、小さな絵がいくつか集まってひとつの見開きレイアウトをつくっていることである。

⑦ 原書レイアウトを改変すること

原書では小さな絵がいくつか集まってひとつの見開き絵を構成しているため、翻訳本『大きいツリー小さいツリー』は、原書の絵を分割しても物語の展開を壊すことなく、再構成が成功している。その際、逆版にした絵によって、物語の展開に支障をきたすようなことにはなっていない。

むしろ、原書どおりの絵は異時同図を多用しているため、とくに幼い子どもたちにはわかりにくい。光吉の編集した読み物の体裁にした『大きいツリー小さいツリー』のほうが、幼い子どもたちには理解しやすいのである。

絵本の翻訳が原書主義の時代に入っているこの時期に、原書のレイアウトの改変をおこなっていることは、時代錯誤かもしれない。鳥越は原書の判型を変えたり、左開き横組みのものを右開き縦組みにするために逆版という処理をおこなうこと、つまりレイアウトの改変を「決定的にまちがって」⁹いるとする。「レイアウトの改変」自体、原作者の制作の意図を無視する行為だといえる。原書が絵本であるものを、読み物の形にするという時点で、無理が生じていることも確かである。

しかし、子どもたちに読みやすく、理解しやすくという配慮からおこなったレイアウトの改変は、全否定できかねる側面を持っている。光吉がこの絵本のストーリーと絵を高く評価し、体裁を変えてまでも、日本の子どもたちに手渡したいと選んで翻訳したことも忘れることはできない。ようやく文字を読めるようになった子どもたちが、原書よりも大きな絵を見てひとつひとつの場面を追いながら、たどたどしくはあれど興味深そうに本を読む姿を想像すれば、光吉が『大きいツリー小さいツリー』の翻訳に託した願いが伝わってくる。

(3) 『ひとまねこざる』シリーズ 6 冊の大型絵本化 (1983-1984 年)

① 〈岩波の子どもの本〉初版本の大型絵本化

第 4 章で考察したとおり、1950 年から 1960 年代に出版された〈岩波の子どもの本〉の海外絵本の翻訳においては、“左開き横組み”の原書を“右開き縦組み”にし、逆版印刷によって原書のレイアウトを壊すという方法を探っていた。1960 年初頭から絵本出版界で、〈岩波の子どもの本〉での翻訳方法の見直しが図られた。この動きのなかで、いち早くレイアウト改変を改め、原書主義による絵本翻訳をおこなったのは、松居直率いる福音化書店の〈世界傑作絵本シリーズ〉であった。

そのような時代の変化を察知した岩波書店は、〈岩波の子どもの本〉シリーズを見直し、

改訂をしいはじめた。岩波書店は第1期出版〈岩波の子どもの本〉で版型を統一し、“右開き縦書き”のために逆版や、原書の絵を分割し統合していた部分等を修正し、原書の判型とレイアウトを再現したものを「大型絵本」として出版した。〈岩波の子どもの本〉シリーズのうち大型絵本化の対象となったのは、『ちいさいおうち』（1965年）、『ひとまねこざる』シリーズ（1973-1974年）、『海のおばけオーリー』（1974年）、『こねこのぴっち』（1987年）である。

こうして、『ひとまねこざる』シリーズも大型絵本化された。絵本のデザインにおいて、その判型も絵本の世界を構築する要素であるとするれば、やはり大型絵本が原作者の意図をより汲んでいると思われる。しかし、大型絵本化原書の表紙の絵や扉の絵は、原書のものを取り入れられることなく、〈岩波の子どもの本〉初版本のまま日本版『ひとまねこざる』のイメージを守っている。この大型絵本化に伴い、レイアウトだけではなく、訳文も修正された。岩波初版本で使われていた時代錯誤と思われるような言葉遣いを、時代に沿うように整えた。その改訳には、初版本の訳者である光吉も立会ったという。¹⁰

『ひとまねこざる』シリーズを、原書、〈岩波の子どもの本〉初版本、大型絵本、1998年発行の小型本を比較し、時代とともに絵本翻訳の理念と方法が変化していった過程を明らかにする。

② 『ひとまねこざる』シリーズをふたたび廉価本で

〈岩波の子どもの本〉シリーズのなかでも、『ひとまねこざる』は根強い人気がある。このため岩波書店は1998年に、ふたたび〈岩波の子どもの本〉特有の菊版変形という版型で、6冊セット（箱入り）の新版で出版した。これは大型絵本化の際に、左開き横組みに修正されたデザインを、菊版変形へと縮小したものである。

レイアウトの改変が否定されるべきものであれば、大型絵本化で原書どおりの判型にしたものを、再び菊判変形型へと押し込める出版は明らかに矛盾した行為だといえる。かつて第1期〈岩波の子どもの本〉の編集にかかわった鳥越は、『ひとまねこざる』シリーズが1998年にふたたび小型化されたことを、時代に逆行していると否定的にとらえている。『ひとまねこざる』シリーズを、原書、〈岩波の子どもの本〉初版本、大型絵本、1998年発行の小型本を比較してみると、やはり原書の形を尊重しているのは大型絵本である。

しかし2000年時点での岩波書店編集部の考え方としては、大型絵本は高く普及が難しいため、廉価でたくさん子どもたちに絵本が手渡せるよう、再び廉価版で出版したとの見解であった¹¹。

③ 大型絵本化における文字表記の検討

では、大型絵本化によって具体的に何がどのように変わったのか。絵本の絵は、原書のレイアウトどおりに改訂されたので、ここでは取り扱わない。次に、大型絵本の文字表記について検討する。

大型絵本での表記の特徴は、以下にまとめられる。

1. 本来カタカナで表記する言葉（外来語）を、平仮名の太字で表記する方法は大型絵本でも採用された。（じょーじ、ぼーる など。）

2. 表紙、扉の絵は、原書どおりとせず、〈岩波の子どもの本〉初版本のままとした。
3. 左開き横組みから右開き縦組みへ、絵のレイアウトは原書どおりに戻し、文章は時にふさわしい訳語へと改訂した。
4. 岩波初版本にあった逆版箇所、原書に特有のページ割りも原書どおりに変わった。

④ 大型絵本化における訳語、文章表現の検討

翻訳における訳語と文章表現をどのように変えていったのかを、原書、岩波初版本、大型絵本の順に表にまとめ、その変化を検討する。

海外文化が多く入ってきている現代と、〈岩波の子どもの本〉初版本が発刊された時代を比べると、日本における海外文化受容の背景に大きな差がある。現代はインターネットも普及し、海外の文化をリアルタイムで難なく入手できる。

しかし『ひとまねこざる』初版本が翻訳出版された1954年は、第二次世界大戦敗戦直後であり、占領期があった関係で一部ではアメリカ文化は流入し始めていたが、まだ一般的には知られていないものも多かった。

アメリカの出版物である『ひとまねこざる』シリーズには、当時では馴染みのない海外文化が多く詰まっていた。日本の子どもたちに世界の文化を伝えるという役割も、〈岩波の子どもの本〉が担ったであろう。

表1 『ひとまねこざる』原書・岩波初版本・大型絵本における訳語の比較

| <i>Curious George Takes a Job</i> 原書(1947) | ひとまねこざる 岩波初版本(1954) | ひとまねこざる 大型絵本(1983) |
|---|------------------------|-----------------------|
| a good little monkey | おさるさん | こざる |
| the keeper | ばんにん | かかりのおじさん |
| the elephant | ぞうさん | ぞう |
| the elephant's right ear | みぎのみみのしたの | みみのしたの |
| the man with yellow hat | きいろいぼうしをかぶった | きいろいぼうしの |
| restaurant | しょくどう | れすとらん |
| a big pot | なべ | おなべ |
| spaghetti | うどん | すばげっていー |
| a little monkey | ちいさなおさる | こざる |
| a lot of | どっさり | たくさん |
| a handy little fellow | 子ども | ちびさん |
| a skyscraper | びるじんぐ | びる |
| got ahead quickly | どしどし | どんどん |
| the painters | ペンキや | ペンキやさん |
| lunch | おべんとう | おひる |
| the door | と | どあ |
| the woman | おんなのひと | おくさん |
| the end of the fire escape | かいだん | ひじょうかいだんのいちばんした |
| Here was his chance. | しめた! | ちゃんすです。 |
| a telephone booth | こうしゅうでんわ | でんわぼっくす |

| | | |
|-------------------------|--------|---------|
| the car | じどうしゃ | くるま |
| the president' s office | さつえいじょ | しゃちょうしつ |
| / | あばーと | まんしょん |

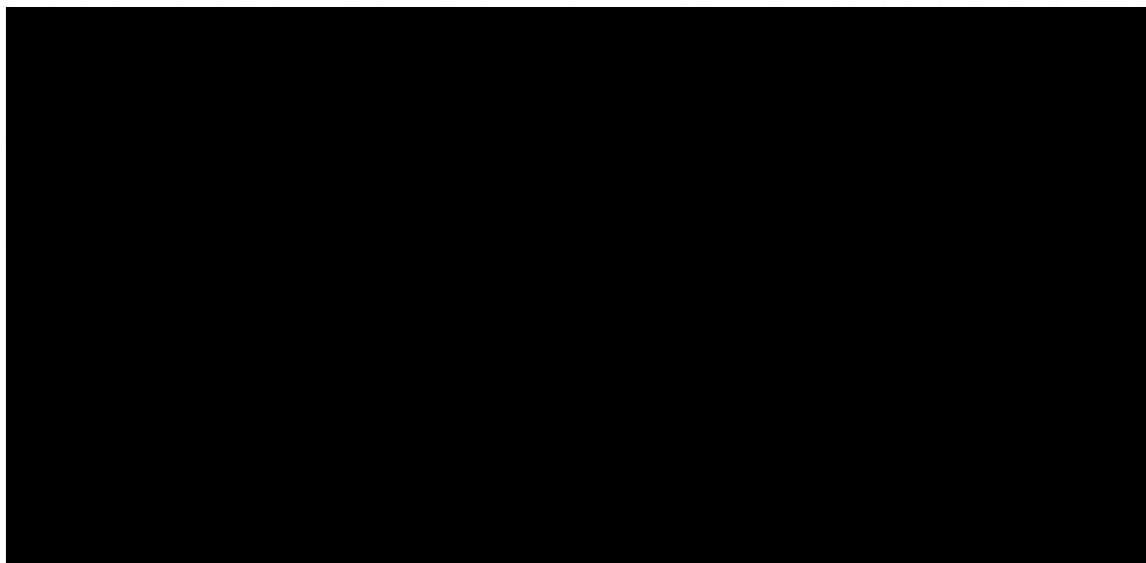


図 13 “spaghetti” → 「うどん」 → 「すばげってー」

表 2 『ひとまねこざるびょういんへいく』原書・岩波初版本・大型絵本における
文章表現の比較

| <i>Curious Goerge Goes to the Hospital</i> 原書(1966) | ひとまねこざるびょういんへいく 初版本 (1966) | ひとまねこざるびょういんへいく 大型絵本 (1984) |
|---|----------------------------|-----------------------------|
| good little | かわいいおとなしい | かわいい |
| It was full of | つまって | はいって |
| you | おまえ | きみ |
| outside the office | にゆういんのかかりのところには | じむしつのそとには |
| a go-cart | ておしぐるま | くるまいす |
| was glad | やれやれとおもいました | ほっとしました |
| a pill | がんやく | くすりをひとつぶ |
| looked funny | とてもこっけいに | へんなかおに |
| a puppet theater | にんぎょうしばいのこや | にんぎょうしばいのぶたい |
| was curious | うずうずしてきました | じっとしてられなくなりました |
| through the air | そらへ | ちゅうへ |
| climbed | よじのぼりました | のりこみました |
| was too excited to listen | なんにもみみにはいりません | なにもきこえませんでした |
| lunch carts | ひるごはんのくるま | ひるごはんのわごん |

上の表2で示した『ひとまねこざるびょういんへいく』については、初版本ではページ数の制約があったため、原書にある文章を削り、話の筋にあまりかかわりのないと思われる詳細な描写を省いていた。しかし大型絵本化の際には、原書 *Curious George Goes to the Hospital* にある文章は全て翻訳し、完全に原書を翻訳している。

⑤ 絵のなかに書かれた文字の検討

さらに『ひとまねこざる』シリーズの絵のなかに書かれている文字についても、代表的なものを2つ挙げ考察した。

(i) 売店の看板に書かれた商品名

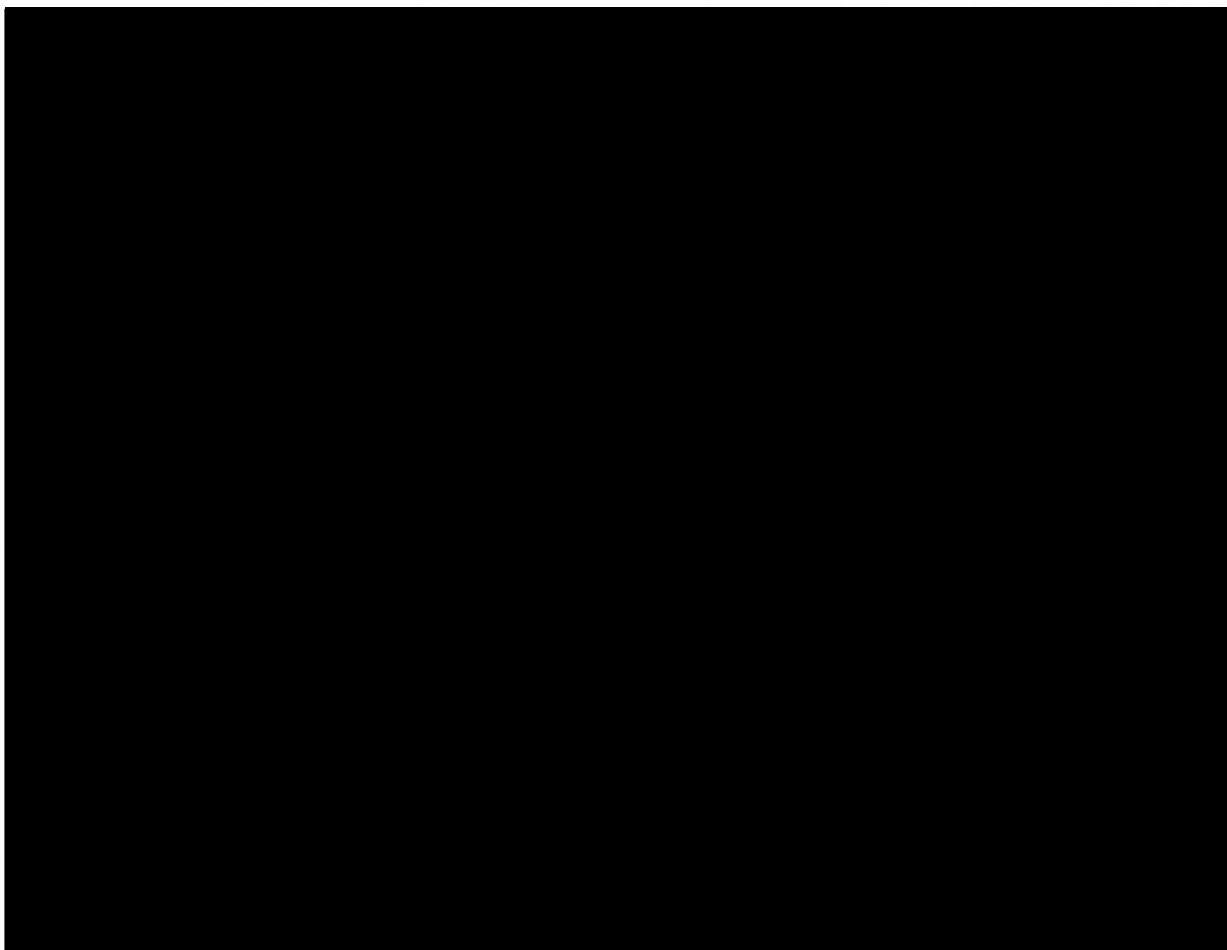


図14 『ひとまねこざる』売店の看板に書かれた商品名

表3 絵のなかに書かれた文字の訳語

| 原書 | 岩波初版本 | 大型絵本 |
|----------|--------|--------|
| HOT DOGS | (表記なし) | ホットドッグ |
| MILK | サイダー | サイダー |
| SODA | ラムネ | ラムネ |
| LEMONADE | ジュース | ジュース |

| | | |
|-------------|--------|--------|
| POSTCARD | キャラメル | キャラメル |
| GUIDES | ドロップ | ガム |
| ANIMAL FOOD | アンパン | ハンバーガー |
| CHOCOLATES | チョコレート | チョコレート |

表 3 のとおり、原書、岩波初版本、大型絵本の各項目の訳され方を調べたところ、動物園の売店で売られるものが日本とアメリカで違いがあるにしろ、かなり大幅に変えてあることが分かった。大型絵本化の改訂のときにさえ、原書に基づいて訳されてはいない。これは日本とアメリカの文化的背景を考慮してのことだと考えられる。

文字を読み始める段階の子どもたちは、絵の中の小さな文字でひじょうに興味深く見ている。1954 年の岩波初版本では時代的に適切な訳語をつけることも無理であったものも、大型絵本化の改訂の際に出来ることならば原書の言葉に対応する言葉に翻訳するべきだったのではないかと考えられる。

(ii) 箱に書かれた商品名

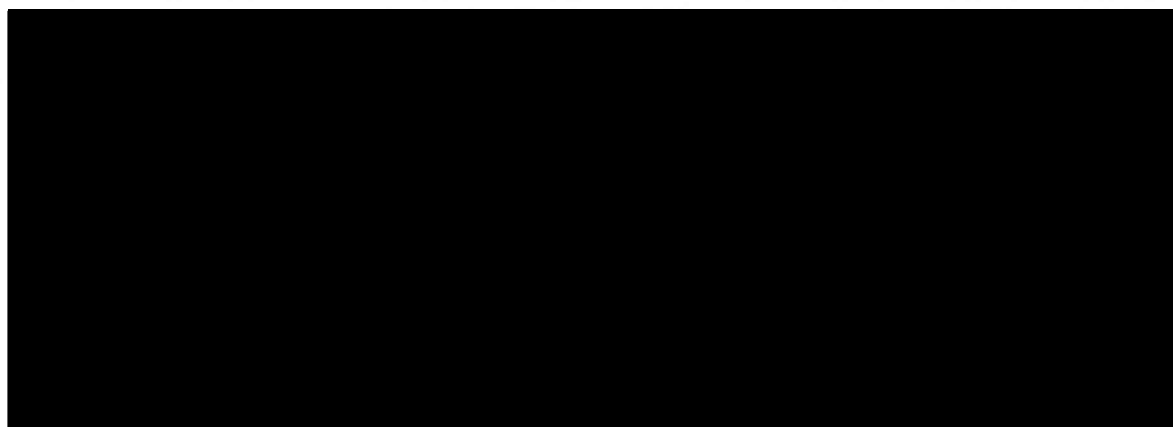


図 15 『ひとまねこざるびょういんへいく』はめえの箱の文字

改訂版では原書どおりに「はめえ」も文字の背景部分が黄色 2 行になっているが、この黄色の部分が 2 行になっているのは、JIGSAW / PUZZLE が 2 行にわたって配置されているためである。改訂版でこの黄色部分を原書通りにしたとはいえ、これでは初版本の配慮のほうが見やすく良心的である。

⑥ 大型絵本化の考察

調査の結果、『ひとまねこざる』シリーズの大型絵本化の際には、絵のレイアウトは原書を忠実に再現する形にしている。時代の流れによって日本語を横書きにすることも一般化され、原書主義にそくした左開き横組みのままでの出版が可能になっている。

絵本の文章については、訳語は文化の移植の進み具合によって、岩波初版本ではどうしても原書どおりに訳せなかった言葉を、時代にあわせた言葉に修正してあることが明らかになった。とくに外来語や文化そのものにかかわる言葉、例えば、作品に出てくる映画撮影、エーテル、スパゲッティ、地下鉄、ロケット、ヘリコプター、恐竜などは、岩波初版本の時点では、日本で一般的に文化としてのイメージが浸透していなかったで

あろう。

文章表現についても、より現代的な表現に改訳されている。例えば「こっけい」が「へん」という言葉遣いに修正されている。ただし、初版本の臨場感あふれるものが改訳したために、かえって無難な面白みに欠ける表現になってしまっているケースもあった。いわゆる時代錯誤と思われるような言葉遣いでも、リズム感があり、物語の展開にほどよいスピード感をもたらしているものもある。また岩波初版本で使用された擬態語、擬音語もかなり削られ、改訳後は上品にまとまりすぎている傾向がみられた。翻訳作品に新訳つける作業は、昨今ことに多く行われているが、必ずしも新訳が良いとはいえない場合もあるのではないだろうか。

訳語と文章表現の比較調査から、外国文化の普及状況という時代背景と、編集の配慮をうかがい知ることができた。

2 評論

第Ⅰ期、第Ⅱ期と比較して、第Ⅲ期における光吉の子どもの本に関する評論は割合が高く、特に絵本に関するも評論の数は多い。このことは1970-80年代、絵本が一般化され、評論の対象となるほどまでに認知されてきたことを示している。絵本の出版点数も、毎年、右肩上がりに伸びていた時代である。絵本の需要が高まるにつれて、戦中・戦後から絵本に関わってきた光吉の役割は、翻訳だけではなく、評論執筆や資料公開へと変わっていった。ここでは、第Ⅲ期の評論のうち、おもだった3つの連載を中心に、光吉の資料収集と整理の意味に言及しつつ、考察する。

(1) 「子どもの本の世界から—その文献と資料—」

連載『子どもの館』福音館書店 1974年7月-1980年7月（全68回）

① 雑誌『子どもの館』と編集者澤田精一

児童書専門出版社である福音館書店は、1973年に『子どもの館』を刊行した。児童書の評論だけでひとつの雑誌が成立する豊かな時代であったといえよう。

『子どもの館』は成人対象の児童文学雑誌である。1973年6月から1983年3月までに全118冊を刊行した。子どもの本が多数刊行されているにもかかわらず、真に古典となりうる質をもったものが稀有な日本の出版状況のなかから、マーケットと文壇のみを指向した子どもの本のつくり方を否定し、真に書きたいものをもっている人のために場を提供し、同時に子どもの本を根底から問い直すことを目的として発刊された。そのためには大人の本の書き手はもとより、境界領域の心理学、文化人類学、民俗学などの研究者、辻邦生、西郷信綱、木下順二、河合隼雄、川田順三ほかが起用され、子どもの文化を総合的に考察するさまざまな試みがなされた。センダック、サトクリフなどの欧米の作家にインタビューがなされ、現代の児童文学の問題点が浮き彫りにされた。児童文学は文学でなければならないという観点からの書評も続いた。創作では詩、物語を問わず、数々の新しい試みがなされた。そのなかから後世に残るすぐれた作品も生まれた。表紙を飾った世界の古典絵本は、デザイナーの堀内誠一が手掛けた¹²。

元福音館書店編集者の澤田精一は、編集者としてこの連載の12回目から最終回までを担当した。澤田は光吉との出会いをこのように語る。下記はインタビューからの抜粋である。

——光吉さんの経歴や人物像はあまり知られていませんし、今では交流のあった方が少なくなつたと聞きますが、澤田さんと光吉さんとの親交についてお聞かせください。

私が光吉さんにはじめて出会ったのは、『子どもの館』（福音館書店）の編集をしていたとき。光吉さんの連載の一二回目（一九七五年八月）から担当になった。夏の暑い日に福音館にいられて、涼しげな麻の白いスーツに蝶ネクタイという姿で、パナマ帽を取りながら挨拶された姿は忘れられない。お洒落でダンディーな方だった。

——雑誌『子どもの館』は戦後の児童文学・絵本の全盛期という時代を象徴するような評論誌であり、子どもの本が多様な人々に共有され、質的向上を目指す熱気が感じられました。光吉さんの『子どもの館』の連載「子どもの本の世界から—その文献と資料—」（全六八回）はどのようないきさつで始まったのですか。

この掲載は、光吉さんが長年にわたって蒐集された古今東西の文献を整理した資料の公開だった。文献のなかから一つを見開き二ページで翻訳し、あとの資料は書誌を載せるという形態。まず、『子どもの館』編集長の菅原啓州さんが、光吉さんの秘蔵の資料をぜひ公開してほしいと依頼した。しかし最初、断られたらしい。作家作品の調査には終わりがなく、いつも訂正していないといけなく、最終的な完成が見込めない仕事だから。それと、この資料は自分の虎の子みたいなものだから、聞かれば、これはこうですよと答えるけれども、それを人前に出すことには、少し抵抗がおりになったようだ。しかし根気強く説得して連載が始まった。

澤田は当時の思い出を、「光吉夏弥さんのこと」¹³というエッセイにも綴っている。

(略) 光吉さんは数多い翻訳、編集の仕事もさることながら、まったく地味な文献資料をこつこつと独力でまとめられていました。二階の書斎の一隅に図書館カードがはいったボックスがいくつも積み上げられていて、そのカードをひくとタイプでびっしりと、どの著者にはどこの本にだれが評論を書いているか一目でわかるように打ってありました。そして机のわきには、そのために目を通された新聞、雑誌などが幾重にもかさなっていました。この文献カードをまとめながら、毎月一遍の論文を選んで訳出し、掲載したのが「子どもの本の世界」です。(中略) 連載終了後、光吉さんはなおも資料の収集につとめられ、完成をめざされ、私もずいぶんお手伝いさせていただきましたが、いくつかの事情がかさなり、単行本としてかたちにならないうちに光吉さんの他界があったことはかえすがえすも残念なことです。

② 光吉の連載について

光吉は『子どもの館』に6年間にわたって「子どもの本の世界から—その文献と資料—」全68回を連載した。1回から22回まではイラストレーター、イラストレーションに関して、そして24回から¹⁴最終回(68回)は児童書のライターに関する評論、資料の公開をした。その連載では、世界の著名な児童文学作家・画家を取り上げ、経歴や作品について、秘蔵資料をもとに詳しく紹介している。翻訳される文献も資料も、光吉の視点で選び出している。

連載の形態としては、ひとつのテーマの代表的なひとつの文献の翻訳と、文献の紹介というものであった。はじめの見開き2ページは文献の翻訳である。文献翻訳のあとの数ページには、光吉の情報カードからそれぞれの作家や画家、作品に関する書評や研究文献のリストを載せている。下の表4は「子どもの本の世界から—その文献と資料—」(全68回)のリストである。

表4 「子どもの本の世界から—その文献と資料—」全68回リスト

| | |
|------------|---|
| 1974.07.01 | 「新連載：子どもの本の世界から—その文献と資料1 文献 絵本をつくるバージニア・リー・バートン」『子どもの館』14号 福音館書店 (pp.68-72) |
| 1974.08.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料2 資料 絵本のタイムテーブル ジャン・P・コルビー」『子どもの館』15号 福音館書店 (pp.90-96) |

| | |
|--------------|---|
| 1974. 09. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料3 絵本の創作 エドワード・アーディゾーニ」『子どもの館』16号 福音館書店 (pp. 74-80) |
| 1974. 10. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料4 絵本の特質 マーシア・ブラウン」『子どもの館』17号 福音館書店 (pp. 88-98) |
| 1974. 11. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料5 ランドルフ・コールデコット バーサ・マホニー・ミラー」『子どもの館』18号 福音館書店 (pp. 50-57) |
| 1974. 12. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料6 ディズニーを糾弾する フランセス・クラーク・セーヤーズ」『子どもの館』19号 福音館書店 (pp. 62-69) |
| 1975. 01. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料7 中国のアヒル エリザベス・R・モンゴメリ」『子どもの館』20号 福音館書店 (pp. 78-84) |
| 1975. 02. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料8 グリーナウェイの芸術 ロバート・ローソン」『子どもの館』21号 福音館書店 (pp. 70-76) |
| 1975. 03. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料9 わたしたちの絵本づくりヘーダー夫妻」『子どもの館』22号 福音館書店 (pp. 84-89) |
| 1975. 04. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料10 コラージュについて エズラ・ジャック・キーツ」『子どもの館』23号 福音館書店 (pp. 68-74) |
| 1975. 05. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料11 子どもにはすべてを ロバート・ローソン」『子どもの館』24号 福音館書店 (pp. 120-127) |
| 1975. 06. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料12 イメージの時代 ベニ・モントレソール」『子どもの館』25号 福音館書店 (pp. 78-84) |
| 1975. 07. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料13 ビアトリクス・ポター ルーマー・ゴッデン」『子どもの館』26号 福音館書店 (pp. 88-94) |
| 1975. 08. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料14 アーサー・ラッカム エレン・シャッフアー」『子どもの館』27号 福音館書店 (pp. 82-88) |
| 1975. 10. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料15 センダック氏の仕事場でL・B・ホプキンス」『子どもの館』29号 福音館書店 (pp. 118-127) |
| 1975. 11. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料16 ジェイムズ・サーバーとの対話 A・クック」『子どもの館』30号 福音館書店 (pp. 104-110) |
| 1975. 12. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料17 イーラの写真絵本 ジェーコブ・デシン」『子どもの館』31号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1976. 02. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料18 子どもの本の絵についてベッティーナ(エールリヒ)」『子どもの館』33号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1976. 03. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料19 フランスは遅れているクリスチーニ・シャヌー」『子どもの館』34号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1976. 04. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料20 古典の描き直し ジョン・ルイス」『子どもの館』35号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1976. 05. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料21 手彩色からカラー印刷へパーシー・ミュア」『子どもの館』36号 福音館書店 (pp. 121-127) |
| 1976. 06. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料22 絵本の爆発 フランツ・カスパー(スイス児童文学研究所長)」『子どもの館』37号 福音館書店 (pp. 70-74) |

| | |
|------------|--|
| 1976.07.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料23 クイズ20問 ルイス・ハーショー、ディク・マクビーン」『子どもの館』38号 福音館書店(pp.125-128) |
| 1976.08.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料24 『四人姉妹』の家 フランシス・ステイーグマラー」『子どもの館』39号 福音館書店(pp.122-127) |
| 1976.09.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料25 人魚姫の嘆きだれが彼女の首を奪ったか?」『子どもの館』40号 福音館書店(pp.120-127) |
| 1976.10.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料26 ピーター・パンとわたし ウォルト・ディズニー」『子どもの館』41号 福音館書店(pp.122-127) |
| 1976.11.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料27 オズの魔法使い ジョセフ・ハース」『子どもの館』42号 福音館書店(pp.122-127) |
| 1976.12.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料28 『小公子』異聞 コンスタンス・ビュエル・バーネット」『子どもの館』43号 福音館書店(pp.122-127) |
| 1977.01.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料29 ピーター・ラビットの名親 ソートン・バージェス ロバート・フロマン」『子どもの館』44号 福音館書店(pp.119-127) |
| 1977.02.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料30 “写真家”ルイス・キャロル ブルース・ダウンス」『子どもの館』45号 福音館書店(pp.122-127) |
| 1977.03.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料31 「アリス」・オン・ステージ」『子どもの館』46号 福音館書店(pp.122-127) |
| 1977.04.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料32 ピノッキオ讃 アイダ・シュレーダー」『子どもの館』47号 福音館書店(pp.121-127) |
| 1977.05.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料33 昔ばなしのH・クールランダー ダイアン・ウォルクスタイン」『子どもの館』48号 福音館書店(pp.124-127) |
| 1977.06.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料34 摩天楼を建てよう、だが、まず、よい本を見つけよう ロアルド・ダール」『子どもの館』49号 福音館書店(pp.120-127) |
| 1977.07.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料35 『クリスマス・カロール』エドガー・ジョンソン」『子どもの館』50号 福音館書店(pp.124-127) |
| 1977.08.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料36 シャーロック・ホームズとの最初の出会ひ エラリー・クイーン」『子どもの館』51号 福音館書店(pp.122-127) |
| 1977.09.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料37 チャールズ・J・フィンガー(1869-1941)のこと ヘレン・フィンガー・レフラー」『子どもの館』52号 福音館書店(pp.122-127) |
| 1977.10.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料38 子どものための本選びについて—おとなに苦しめられる小さな読者のための人権宣言— ドロシー・カンフィールド・フィシャー」『子どもの館』53号 福音館書店(pp.121-127) |
| 1977.11.01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料39 「パッフィン」の生みの親 エリナー・グレーアム」『子どもの館』54号 福音館書店(pp.122-127) |

| | |
|--------------|---|
| 1977. 12. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料40 ルネ・ギヨのこと グウェン・マーシュ」『子どもの館』55号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1978. 01. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料41 ポール・アザールのこと マーグリット・ミッチェル」『子どもの館』56号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1978. 02. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料42 父ジョーゼフ・ジェイコブズの思い出 メイ・ブラッドジョー・ヘーズ」『子どもの館』57号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1978. 03. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料43 エーリヒ・ケストナー その芸術と現実 R・W・ラスト」『子どもの館』58号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1978. 04. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料44 キプリングのジャングル 現実か空想か ローナ・ガーテ」『子どもの館』59号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1978. 05. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料45 いろいろな色の上着 ラングのカラー童話集」『子どもの館』60号 福音館書店 (pp. 121-127) |
| 1978. 06. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料46 ドリトル先生 その生涯と仕事 ヘレン・ディーン・フィッシュ」『子どもの館』61号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1978. 08. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料47 サムイル・マルシャーク 1887-1964 ミリアム・モートン」『子どもの館』63号 福音館書店 (pp. 120-127) |
| 1978. 09. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料48 途方もないスクラップブック ひとりの主婦が築いた『マイ・ブック・ハウス』」『子どもの館』64号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1978. 10. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料49 アン・キャロル・ムーア J・D・ニュース」『子どもの館』65号 福音館書店 (pp. 121-127) |
| 1978. 11. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料50 オブライエンと白銀の犬 エリザベス・ライダー・モンゴメリー」『子どもの館』66号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1978. 12. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料51 ペール・カストールをしのぶ ベッティーナ・ヒューリマン」『子どもの館』67号 福音館書店 (pp. 120-125) |
| 1979. 01. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料52 『仔鹿物語』(『イヤリング』)について マージョリー・K・ローリングス」『子どもの館』68号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1979. 02. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料53 『黄金の川の王さま』 メイ・ランバートン・ベッカー」『子どもの館』69号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1979. 03. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料54 ストーリーテリングと昔話 フランセス・C・セイアーズ」『子どもの館』70号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1979. 05. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料55 アーネスト・トムソン・シートン ロジャー・ランズリン・グリーン」『子どもの館』72号 福音館書店 |

| | |
|--------------|---|
| | 店 (pp. 121-127) |
| 1979. 06. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 5 6 ハイジはいまも跳んでいく エリザベス・エンライト」『子どもの館』73号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1979. 07. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 5 7 戦争を醸し出した彼女の本 フォレスト・ウィルソン」『子どもの館』74号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1979. 08. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 5 8 ノエル・ストレット・フィールド エリック・リーランド」『子どもの館』75号 福音館書店 (pp. 123-127) |
| 1979. 09. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 5 9 ノルウェーから来たストーリーテラー ジャスミン・ブリトン」『子どもの館』76号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1979. 10. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 6 0 P・L・トラヴァース リー・ベネット・ホプキンス」『子どもの館』77号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1979. 12. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 6 1 トム・ソーヤの町 ジョン・A・ウインクラー」『子どもの館』79号 福音館書店 (pp. 122-125) |
| 1980. 01. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 6 2 マーク・トウェーンの洞穴」『子どもの館』80号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1980. 02. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 6 3 “木はいいなあ” リー・ベネット・ホプキンス」『子どもの館』81号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1980. 03. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 6 4 ジュール・ヴェルヌ ハリー・G・トンプキンス」『子どもの館』82号 福音館書店 (pp. 121-127) |
| 1980. 04. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 6 5 H・G・ウェルズの概要 ゴッドフリー・スミス」『子どもの館』83号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1980. 05. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 6 6 『レベッカ』のケイト・ダグラス・ウィギン ローラ・ベネイ」『子どもの館』84号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1980. 06. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 6 7 『スイスのロビンソン』 エリザベス・ライダー・モントゴメリー」『子どもの館』85号 福音館書店 (pp. 122-127) |
| 1980. 07. 01 | 「子どもの本の世界から—その文献と資料 最終回 幼児のための作家プロトウ リー・ベネット・ホプキンス」『子どもの館』86号 福音館書店 (pp. 121-127) |

つぎに絵本評論に着目し、『子どもの館』での連載のうち、絵本に関して取り上げた人物を以下に挙げる。

バー吉ニア・リー・バートン
 ジャン・P・コルビー
 エドワード・アーディゾーニ
 マーシア・ブラウン
 ランドルフ・コールデコット
 ウォルト・ディズニー

マージョリー・フラック
ケイト・グリーンハウエイ
ヘーダー夫妻
エズラ・ジャック・キーツ
ロバート・ローソン
ベニ・モントレソール
ビアトリクス・ポター
アーサー・ラッカム
モーリス・センダック
ジェイムズ・サーバー
イーラ、ベッティーナ・エールリヒ
クリスチーニ・シャヌー
ジョン・ルイス
パーシー・ミューア
フランツ・カスパル

③ 光吉の資料収集と情報の整理を裏付ける情報カードの存在

この連載で公開された光吉の秘蔵資料は、いったいどのようにまとめられたのであろうか。先の澤田による文章でも情報カードについて触れられているが、光吉自身も 1943 年に発表した評論「翻訳者の反省」(『少国民文化』日本少国民文化協会 1943 年 1 月)において、カードの存在を裏付ける文章を書いている。

僕は自分の参考のために、明治以来の海外の児童読物の翻訳年表と、作者別の作品カードを作つてゐる。これをみると、どういふ作家の、どういふ作品が、いつの時代にどういふ風に移植されたか、さらに今どうなつてゐるかなどのいろいろな点がうかゞへて、今日までの海外児童文学のありかたが展望されるのである。

現在この情報カードは光吉文庫に所蔵されているが、文庫を管理する白百合女子大学児童文化研究センターの関係者さえ、ケースに入ったこの膨大な情報カードが何を意味するものなのかわからなかったという。しかし筆者がおこなった鳥越信、澤田精一、みつじまちこへのインタビューから、この資料が何を意味するものなのかが解明された。

調査の結果、これらの情報カードは児童文学作家、絵本作家・画家などの情報をまとめたものだということが明らかになった。情報カードは 2 種類に大別されていて、ひとつは作家別にまとめられた作品のリスト(邦訳情報を含む)、もうひとつは作家・画家別にまとめられた書評や研究文献のリストであることも判明した。

情報カードは、作家・画家 ABC 順に並べられいくつかのボックスに入った状態で保管されている。そのカードを検索すれば、作品の書誌はもちろんのこと、その作家・画家に関してどの雑誌や単行本に誰がどのような批評や評論を書いているかなどが即座にわかるようになっている。

④ 『子どもの本の世界から—その文献と資料—』第 1 回目から

図 16 は、連載の第 1 回目の見開きである。この第 1 回目の「はじめに」には、連載の

意図が光吉の言葉で述べられているので、以下に引用する。

児童文学に関する文献と資料は、最近かなり多くなったものの、まだけっして十分ではない。この分野の研究そのものが、さかんになりだしてからまだ日が浅いので、とうぜんのことかもしれないが、それにしてもバージニア・リー・バートンのようなすぐれた絵本作家に関するものでも、末尾に挙げたくらいしかない。

毎年出るおびただしい子どもの本の書評の数こそ多いが、実のある評論や文献的価値をもつ文章は、海外でもそれほど出ては来ないのである。もちろん、日本については、それらを漁るのに大きなハンディキャップを背負わなければならないが、できるだけ広い範囲でわたしの目にふれ、共感を呼んだものを紹介していきたい。

順序はべつに系統立てない。かたい論文をとり上げることもあるだろうし、親しみのある作家の言葉を披露することもあるだろう。それはそのときどきの随意の選択と、わたし自身の資料の整備の状況にまかせるとして、最後にかたちのつくものにしたいと念願している。なにかのお役に立てば幸せである。

光吉がこの連載で、自分がこれまで集めてきた作家作品に関する文献と資料を公開する意欲を持っていることがわかる。「研究」「論文」という言葉に示されるように、光吉は児童文学に関する作家作品研究の必要性を感じていることがうかがえる。

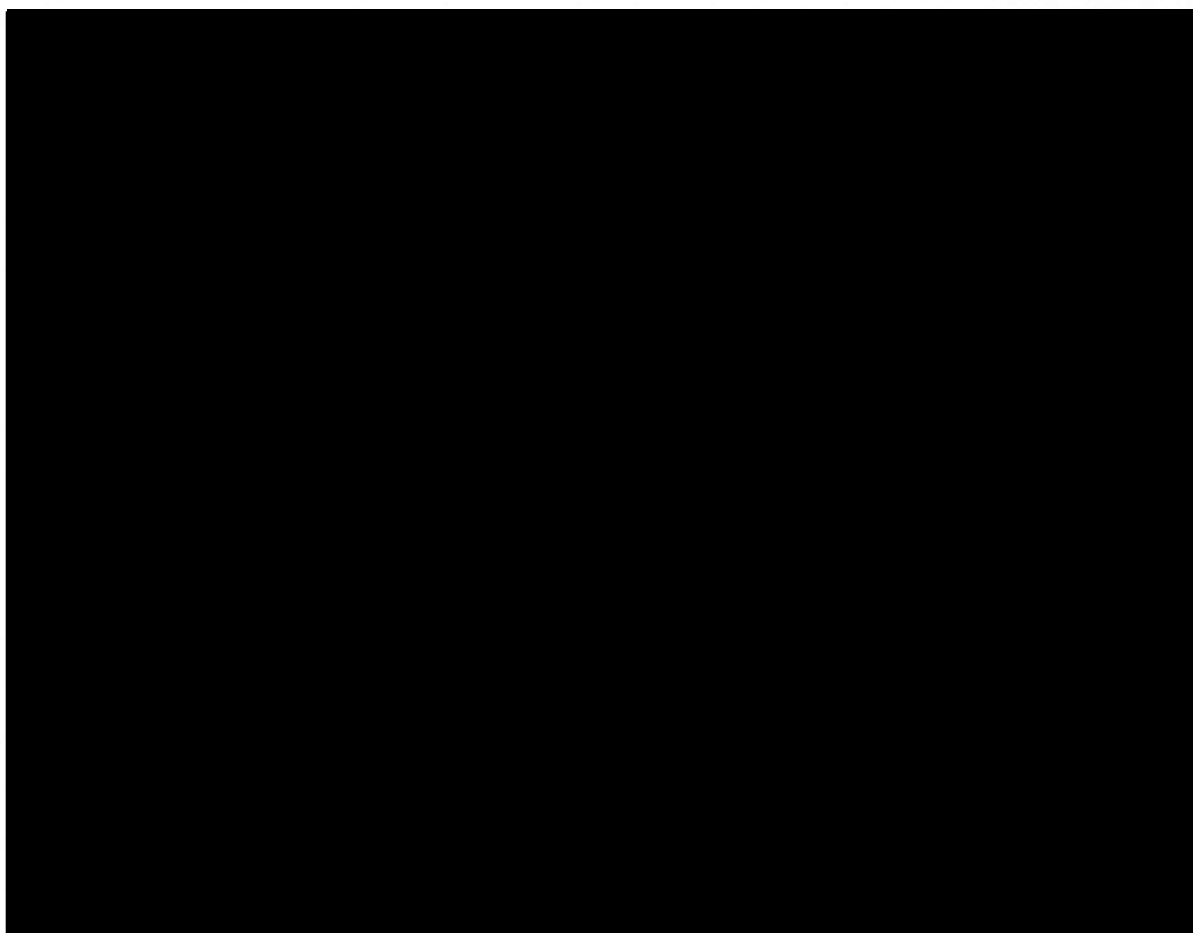


図 16 「子どもの本の世界から—その文献と資料—」 第 1 回

『子どもの館』福音館書店 1974年7月 (pp. 68-69)

次に、第1回目の資料編を光吉文庫の情報カードと照らし合わせてみた。この回では、バージニア・リー・バートンの文献を載せていることから、光吉文庫のBのボックスを調査した。調査の結果、バートンに関する情報カードとして、書評・研究文献リスト3枚(図17)、作品リストをまとめたもの2枚(図18)が見つかった。

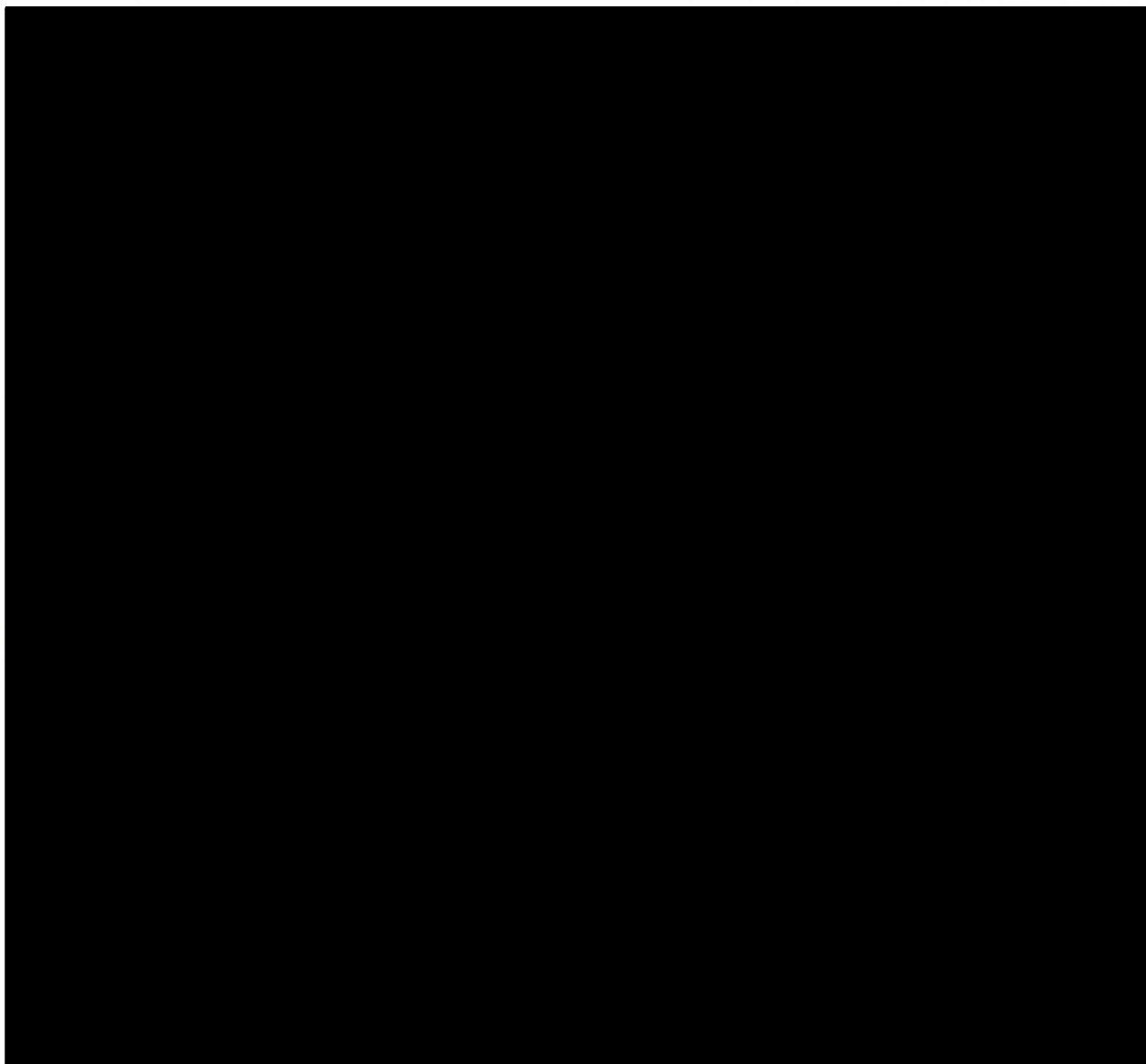


図17 バートンの書評・研究文献リスト カード3枚
(上から1)、2)、3)の順、左:表面・右:裏面)

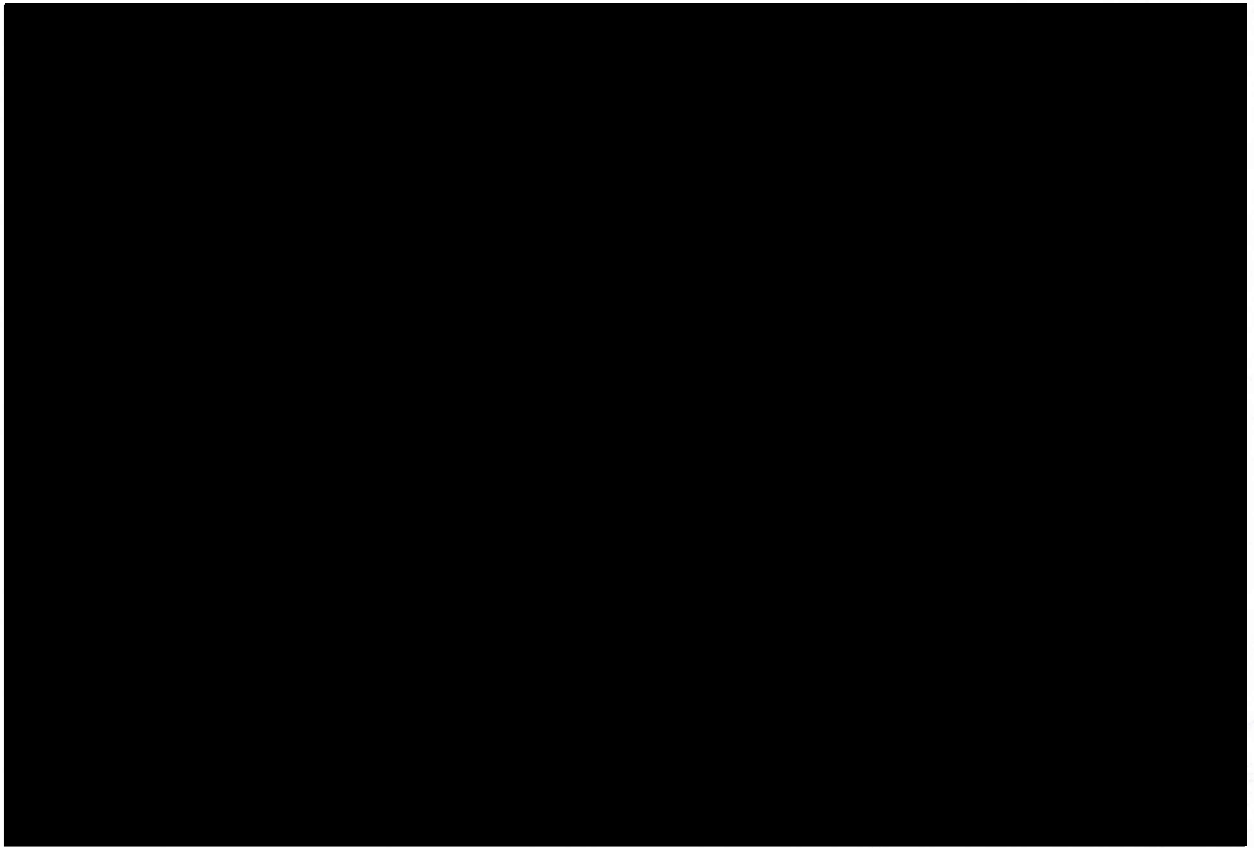


図 18 バートンの作品リスト カード2枚
(上から 1)、2) の順、左：表面・右：裏面)

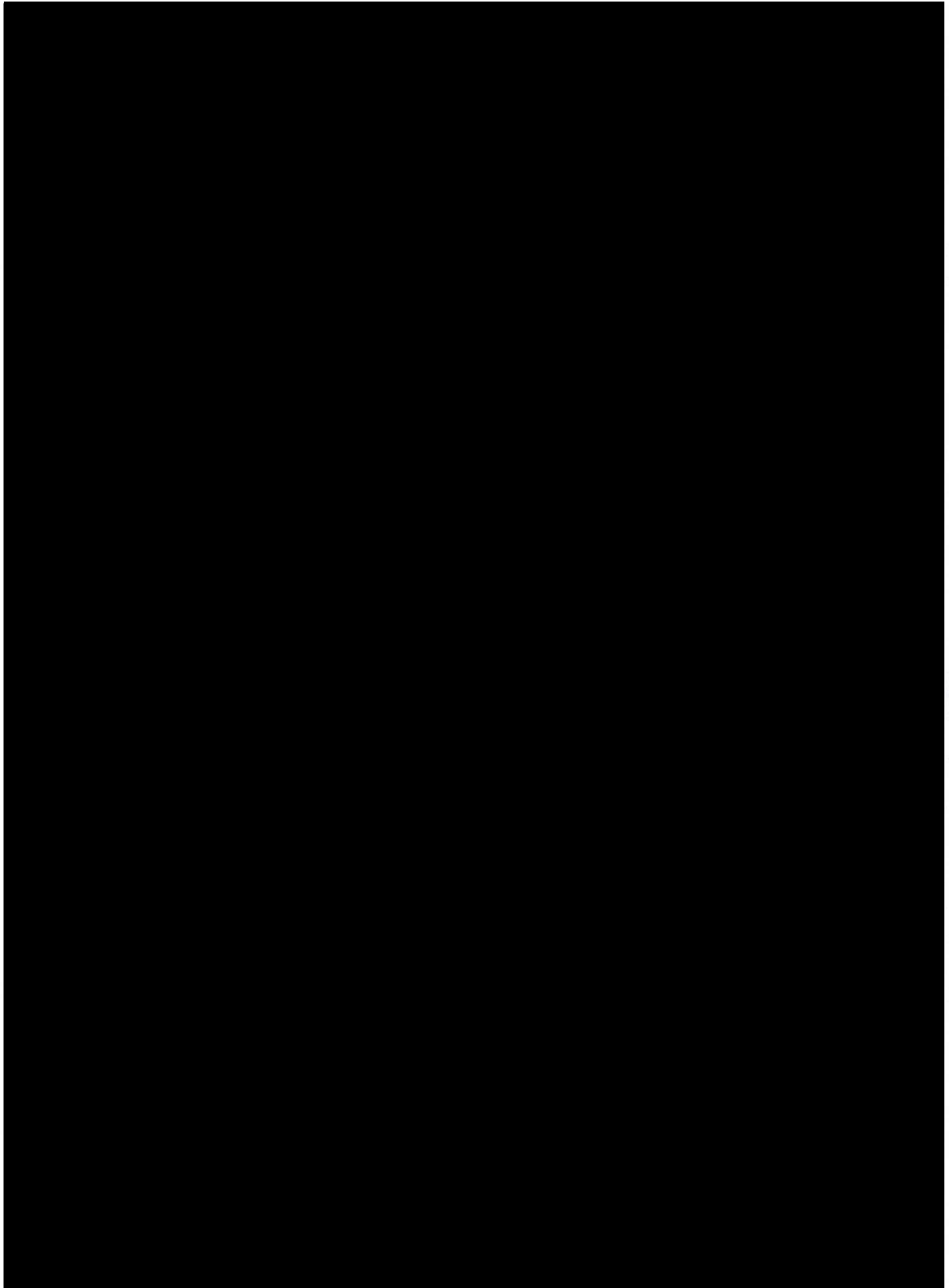


図 19 バートンの書評・文献リスト カード 1) 表面と
「子どもの本の世界から—その文献と資料—」第 1 回 資料 (p. 72)

図 19 は、バートンの書評・研究文献リストカードの 1) 表面と、「子どもの本の世界から—その文献と資料—」第 1 回 資料 (p. 72) を上下に並べたものである。2 つを照らし

合わせてみた結果、連載の資料には光吉の情報カードの情報を載せていることが明らかとなった。赤色の枠で囲んだ文献、青色の枠で囲んだ文献は、一致しているものである。

カードにある手書きの書き込みからは、新たな情報を入手する都度、カードを加筆修正して情報を更新していたことがわかる。光吉のこの作業は本来、一人では困難なほど煩雑かつ時間と手間のかかる作業である。児童書翻訳、出版のためには、必要不可欠な資料と整理だと考えて、光吉はこの作業を地道に続けていたと思われる。

⑤ 資料公開の意義

「子どもの本の世界から—その文献と資料3 絵本の創作 エドワード・アーディゾーニ」『子どもの館』16号（福音館書店 1974年9月 pp.74-80）には、今後の連載で資料をどのように紹介するか提示してある。

1.2回とも絵本に関するものだったのにつづいて、この号からはイラストレーターの名で総称される絵本画家と挿絵画家についての資料をまとめていく。その数はおびただしいし、日本にはまだ親しまれていない人も多い。それでもいずれは親しまれるであろう人々もまじえて、ABC順に、その関係資料を挙げていきたい。資料はかなり多くて、この号には「A」の部類しか納められなかった。この調子だと、いつ「Z」に達するかはわからないが、当分、画家たちの言葉から拾った短かい文をそえたこの形で、資料本位に紹介していくことにする。ひとつひとつの資料についての解題をつける紙面はないので、タイトルだけを列記することになるが、おおよその見当はつけていただけようと思う。

この時期、世界の作家画家について知る資料を持っている人は、片手で数えられるほど少なかったはずである。光吉の文献は専門的すぎて、一部の読者に享受されただけであったことが推測される。しかし、なかには刺激をうけて絵本や児童文学の研究を続けている人もいたようである。実際、石川晴子は光吉の連載を切り取り、ファイリングをして資料として使ったと語っている。

この連載における資料の公開は、絵本や児童文学の基礎研究の発表でもあった。多くの研究者や批評家が、この資料から専門的知識を得ていたのである。

(2) 「絵本の世界」

連載『月刊絵本』すばる書房盛光社 1974年9月-1977年5月（全32回）

① 『月刊絵本』と光吉連載の概要

『月刊絵本』は、絵本の作品紹介や評論等から成り立つ月刊誌である。『日本児童文学大事典』の「月刊絵本」の項¹⁵には、絵本専門誌とある。1973年5月から1979年7月まで全74冊刊行した。別冊・臨時増刊号は8冊ある。創刊号から1974年5月号までは盛光社、1974年6月号からはすばる書房盛光社が出版元である。顧問に、瀬田貞二、編集

委員に若山憲、田島征三、古田足日がつとめる。「絵本とは何か」という命題を追究することを目標に掲げ、国内外の絵本作家、作品の紹介、評論を中心に編集された。1981年9月には、季刊『絵本』としてすばる書房から復刻された。

光吉は『月刊絵本』において32回にわたって「絵本の世界」を連載している。内容は、海外の絵本作家・画家についての経歴、作品を、海外の雑誌や専門研究書の評論・文献を翻訳しながら紹介したものである。以下の表5に「絵本の世界」全32回のタイトル、書誌をリストにしておく。

表5 「絵本の世界」全32回リスト

| | |
|--------------|--|
| 1974. 09. 01 | 「絵本の世界1 写真絵本」『月刊絵本』第2巻第8号 すばる書房盛光社 (pp. 44-47) |
| 1974. 10. 01 | 「絵本の世界2 ルドウィッヒ・ベーメルマンズ」『月刊絵本』第2巻第9号 すばる書房盛光社 (pp. 56-60) |
| 1974. 11. 01 | 「絵本の世界3 マーガレット・ワイズ・ブラウンと三人の“ミスター”ブラウン」『月刊絵本』第2巻第10号 すばる書房盛光社 (pp. 65-69) |
| 1974. 12. 01 | 「絵本の世界4 “おさるのジョージ”のH・A・レイ」『月刊絵本』第2巻第11号 すばる書房盛光社 (pp. 47-51) |
| 1975. 01. 01 | 「絵本の世界5 ヨーロッパ・アメリカ／絵本の旅」『月刊絵本』第3巻第1号 すばる書房盛光社 (pp. 54-58) |
| 1975. 02. 01 | 「絵本の世界6 絵本作家としてのリオ・リオニ」『月刊絵本』第3巻第2号 すばる書房盛光社 (pp. 61-64) |
| 1975. 03. 01 | 「絵本の世界7 デュボアザンの動物たち」『月刊絵本』第3巻第3号 すばる書房盛光社 (pp. 48-51) |
| 1975. 04. 01 | 「絵本の世界8 多芸多才のマーシア・ブラウン」『月刊絵本』第3巻第4号 すばる書房盛光社 (pp. 48-51) |
| 1975. 05. 01 | 「絵本の世界9 二人のロシアの亡命画家」『月刊絵本』第3巻第5号 すばる書房盛光社 (pp. 50-54) |
| 1975. 06. 01 | 「絵本の世界10 バージニア・リー・バートン」『月刊絵本』第3巻第6号 すばる書房盛光社 (pp. 43-47) |
| 1975. 07. 01 | 「絵本の世界11 絵と文のカップル・チームドローレア夫妻とピーターシャム夫妻」『月刊絵本』第3巻第7号 すばる書房盛光社 (pp. 53-57) |
| 1975. 08. 01 | 「絵本の世界12 ワンダ・ガークの民話の世界」『月刊絵本』第3巻第8号 すばる書房盛光社 (pp. 53-57) |
| 1975. 09. 01 | 「絵本の世界13 コラージュのE・J・キーツ」『月刊絵本』第3巻第9号 すばる書房盛光社 (pp. 66-70) |
| 1975. 10. 01 | 「絵本の世界14 ロバート・ローソン」『月刊絵本』第3巻第10号 すばる書房盛光社 (pp. 58-62) |
| 1975. 11. 01 | 「絵本の世界15 ヨーロッパからアメリカへ シュレヴィッツ／ガルドーン／モントレソール」『月刊絵本』第3巻第11号 すばる書房盛光社 (pp. 56-60) |
| 1975. 12. 01 | 「絵本の世界16 ヨーロッパからアメリカへ “ニコラス”とアンゲラー」 |

| | |
|--------------|---|
| | 『月刊絵本』第3巻第12号 すばる書房盛光社 (pp. 56-60) |
| 1976. 01. 01 | 「絵本の世界17 ヨーロッパからアメリカへ シマント/スピーア/シドジャコフ/シミン」『月刊絵本』第4巻第1号 すばる書房盛光社 (pp. 51-55) |
| 1976. 02. 01 | 「絵本の世界18 ヨーロッパからアメリカへ ドマンスカ/ケペシュ/シャロー/テングレン/ワイル」『月刊絵本』第4巻第2号 すばる書房盛光社 (pp. 67-71) |
| 1976. 03. 01 | 「絵本の世界19 SL絵本あれこれ」『月刊絵本』第4巻第3号 すばる書房盛光社 (pp. 60-64) |
| 1976. 04. 01 | 「絵本の世界20 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その1〉ラスロップ/スーエル/レンスキー」『月刊絵本』第4巻第4号 すばる書房盛光社 (pp. 55-59) |
| 1976. 05. 01 | 「絵本の世界21 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その2〉マージョリー・フラック/ヘイダー夫妻」『月刊絵本』第4巻第5号 すばる書房盛光社 (pp. 43-47) |
| 1976. 06. 01 | 「絵本の世界22 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その3〉バーバラ・クーニー/ダーラフ・イプカー/マリー・ホール・エッツ」『月刊絵本』第4巻第7号 すばる書房盛光社 (pp. 50-54) |
| 1976. 07. 01 | 「絵本の世界23 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その4〉アダムス/ホーバン/プローベンセン」『月刊絵本』第4巻第9号 すばる書房盛光社 (pp. 54-57) |
| 1976. 08. 01 | 「絵本の世界24 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その5〉ジーマック/ホグロギアン/ネス」『月刊絵本』第4巻第11号 すばる書房盛光社 (pp. 41-45) |
| 1976. 09. 01 | 「絵本の世界25 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その6〉ジョン・ウォルシュ・アングルンドとバージニア・カール」『月刊絵本』第4巻第13号 すばる書房盛光社 (pp. 50-53) |
| 1976. 10. 01 | 「絵本の世界26 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その7〉ミルハウスとバーカート」『月刊絵本』第4巻第14号 すばる書房盛光社 (pp. 52-56) |
| 1976. 11. 01 | 「絵本の世界27 アメリカ生まれのアメリカ育ち—ストーン/アリキ/カスキン/エイヤー」『月刊絵本』第4巻第16号 すばる書房盛光社 (pp. 43-47) |
| 1976. 12. 01 | 「絵本の世界28 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その9〉ジョンソンとウェーバー」『月刊絵本』第4巻第17号 すばる書房盛光社 (pp. 57-61) |
| 1977. 01. 01 | 「絵本の世界29 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その10〉スタイグとフリーマン」『月刊絵本』第5巻第1号 すばる書房盛光社 (pp. 75-79) |
| 1977. 03. 01 | 「絵本の世界30 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その11〉A・ロベルとR・シャーリップ」『月刊絵本』第5巻第4号 すばる書房盛光社 (pp. 76-80) |
| 1977. 04. 01 | 「絵本の世界31 ハーディー・グラマトキーとレオ・ポリティ」『月刊絵本』第5巻第5号 すばる書房盛光社 (pp. 61-65) |
| 1977. 05. 01 | 「絵本の世界32 R・クラウス/C・ハード/B・レント アメリカ生ま |

32回のうち、1と19の2回分は光吉独自の視点から書いた絵本評論であり、それ以外は海外の雑誌や専門研究書の評論・資料を翻訳し、まとめたものであろうと推測される。1「写真絵本」と19「SL絵本あれこれ」は、光吉独自の絵本観がみられるので検討を試みる。

1 写真絵本

- 2 ルドウィッヒ・ベーメルマンズ
- 3 マーガレット・ワイズ・ブラウンと三人の“ミスター”ブラウン
- 4 “おさるのジョージ”のH・A・レイ
- 5 ヨーロッパ・アメリカ／絵本の旅
- 6 絵本作家としてのリオ・リオニ
- 7 デュボアザンの動物たち
- 8 多芸多才のマーシア・ブラウン
- 9 二人のロシアの亡命画家
- 10 バージニア・リー・バートン
- 11 絵と文のカップル・チームードーレア夫妻とピーターシャム夫妻
- 12 ワンダ・ガーグの民話の世界
- 13 コラージュのE・J・キーツ
- 14 ロバート・ローソン
- 15 ヨーロッパからアメリカへ シュレヴィッツ／ガルドーン／モントレソール
- 16 ヨーロッパからアメリカへ “ニコラス”とアンゲラー
- 17 ヨーロッパからアメリカへ シマント／スピーア／シドジャコフ／シミン
- 18 ヨーロッパからアメリカへ ドマンスカ／ケペシュ／シャロー／テングレン／ワイル

19 SL絵本あれこれ

- 20 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その1〉ラスロップ／スーエル／レンスキー
- 21 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その2〉マージョリー・フラック／ヘイダー夫妻
- 22 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その3〉
バーバラ・クーニー／ダーラフ・イプカー／マリー・ホール・エッツ
- 23 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その4〉アダムス／ホーバン／プローベンセン
- 24 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その5〉ジーマック／ホグロギアン／ネス
- 25 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その6〉
ジョーン・ウォルシュ・アングルンドとバージニア・カール
- 26 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その7〉ミルハウスとバーカート
- 27 アメリカ生まれのアメリカ育ち—ストーン／アリキ／カスキン／エイヤー
- 28 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その9〉ジョンソンとウェーバー
- 29 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その10〉スタイグとフリーマン

- 30 アメリカ生まれのアメリカ育ち〈その11〉A・ロベルとR・シャーリップ
31 ハーディー・グラマトキーとレオ・ポリティ
32 R・クラウス／C・ハード／B・レント アメリカ生まれのアメリカ育ち13

② 「写真絵本」

この評論では、世界の写真絵本をさまざまに紹介しながら、すぐれた写真絵本の特徴を語っている。モノクロ写真ではあるが、光吉の蔵書から、かずかずの写真絵本の見開きを見せながら論をすすめている。第1章でも述べたが、光吉は児童書だけでなく、舞踊と写真の評論家でもあった。絵本も写真も視覚表現、視覚的な芸術の世界である。「写真絵本」の評論は、写真を熟知している光吉のこだわりを感じさせるものである。

図20は、この連載の形態がわかる見開きページである。見開きの上部に絵本が実物の図版とともに紹介されていて、イメージが湧きやすい。

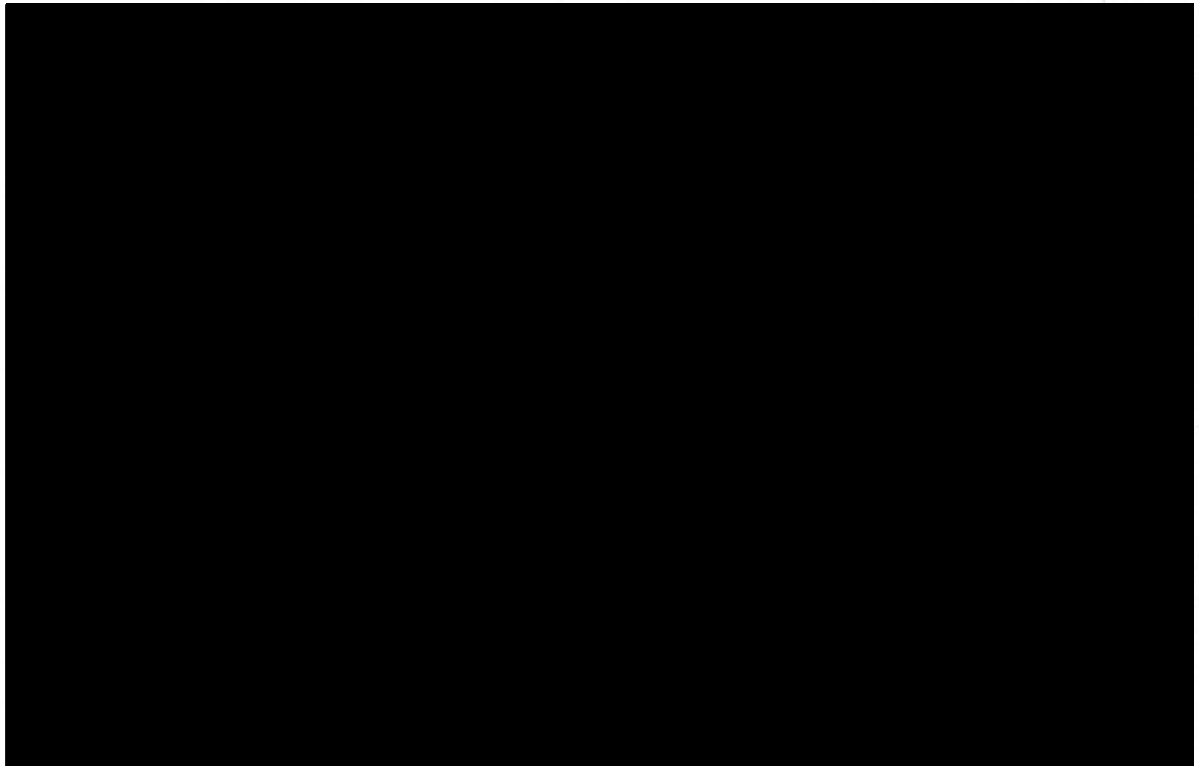


図20 「絵本の世界」1 写真絵本 (pp. 44-45)

はじめに、写真絵本についての光吉の持論が展開されている。

写真が発明されてから、まだわずかに百数十年、絵の歴史とくらべれば比較にならないくらいの短さだが、しかし、もう写真はどんな題材でも、どんな条件でも、こなせるように発達したのだし、写真印刷も進歩して、(中略)花盛りなのだから、子どものための写真絵本も、もっと盛んに出てきてよいわけである。

たしかに絵の歴史は長い、絵本の歴史は二十世紀にはいつてからと見てよく、そ

の成長期は写真のそれとどっこいどっこいで、しかも並行しているのだから、写真絵本もいろいろと試みられていいはずなのに、その数も、すぐれたものも、案外すくない。

それでもやはり、愛蔵に値するものはいくつもあるので、わたしの持っているものの中から目ぼしいものを拾って、概要を展望してみたい。

そして、はじめに写真絵本の作者としてよく知られているスタイケン、イーラを紹介する。続けて、光吉が掘り出したであろう写真絵本作家、アメリカのフリッセル、フランスのドアノーを紹介している。

アメリカの女流写真家のトニー・フリッセルが写真絵本としたスチーブンソンの「幼年詩園」(一九四四)や「マザー・グース」(一九四八)は、中でも傑出したものだ。(中略)フランスの著名な写真家ローベル・ドアノーの数の写真絵本「1. 2. 3. 4. 5」(一九五五)も愛すべきもので、これはまた生粋のパリっ子のカメラワークに成ったものだけに、とともしゃれていて、エスプリにあふれている。

光吉の蔵書の豊かさ、本を選んで蒐集していることがうかがえる。

この評論の最後に、理想的な写真絵本の条件を述べる。

(略)ここに挙げた写真絵本の中に、カラーのものはこの二冊しかない。あとはみな白黒写真である。雑誌や本はむろん、映画もテレビも新聞も、カラーの氾濫でけばけばしい今日、写真絵本にカラーによるものが少ないのは——正確にいうなら、カラーによるすぐれたものが事実、りょうりょうたるものであるのは、なんともふしぎなことだが、写真はやはり白黒が本命で、ただ色があるだけではかえって安手なものになりかねない危険が多いことも、たしかなことには思える。ユージン・スミスもアンリ・カルチュ＝ブレッソンも、あくまでも白黒で通していることが、この際、思いあわされるが、写真絵本はよほどしっかりした写真でないと成り立たないのだから、やはり白黒の、しかも一流の写真家の、子どもへの愛情に強く支えられた仕事だけが——上記のすぐれた写真絵本はみなそうだ——これからも子どもたちの眼を育て、たのしませていくことだろう。

光吉は刺激的なカラーが目立つ時代に、写真の基本を押さえている写真絵本をすぐれているとする。

③ 「SL絵本あれこれ」

「SL絵本あれこれ」では、光吉の蔵書にあるさまざまなSL絵本を紹介する。ここでは、各作品のあらすじや特徴を紹介し、とくに光吉のこだわりが述べられているわけではない。SLという一つのテーマで、世界にはこれほどたくさんの絵本があるのかと驚かされる。この回でも、ふんだんに写真を掲載して、絵本案内を展開している。

具体的には、レンスキーの「がんばった小さなきかんしゃ」「ちいさいきかんしゃ」、ウィリアム・クレイトン・プリオアの「汽車の本」、ダイアナ・ロス文、レウイット／ヒム絵の「小さな赤い機関車に名まえがついた」から、有名なバートンの「いたずらきか

しゃちゅうちゅう」まで、見たことも聞いたこともないような海外絵本から、日本での翻訳があるものまで、多彩な絵本を取り扱っている。あらすじや、画家の絵の描き方、物語のおもしろさを、ところどころに作家や画家の経歴を差し挟みながら、みごとな書評を展開している。ぜひ読んでみたいと思わせる魅力的な紹介である。

④ 光吉夏弥著『絵本図書館—世界の絵本作家たち—』の出版

この「絵本の世界」の連載は、のちにブック・グローブ社の編集を経て、1990年に『絵本図書館—世界の絵本作家たち—』¹⁶（図21）として出版された。

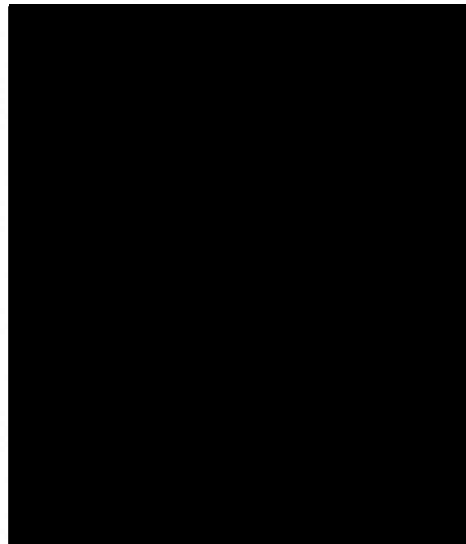


図21 『絵本図書館—世界の絵本作家たち—』

『絵本図書館—世界の絵本作家たち』ブック・グローブ社 1990年

「月刊絵本」に連載された外国の絵本作家についてのエッセイ等をまとめたもので、海外絵本の原作者58人の作家作品論を紹介する、すぐれた評論集である。上記「写真絵本」「SL絵本」の項は掲載されていない。

絵本作家・画家は心のなかにある言葉を、アートという形で表現する。絵本が芸術であるという視座から、絵本作家・画家の経歴や絵本作品の書評をまとめたものである。光吉ならではの美意識をうかがい知ることが出来る。

『絵本図書館—世界の絵本作家たち—』で、集成された欧米絵本の紹介、翻訳、研究等、光吉の長年の尽力が認められ、1990年11月に第14回日本児童文学学会特別賞を受賞した。

しかし、この連載をもとにした出版には問題点もあった。それは、光吉が引用した文献名が明記されていないという問題である。光吉はさまざまな文献からの引用を用いつつ、一つひとつの評論を構成していったと思われる。鳥越らが『絵本の歴史をつくった20人』を出版するための共同研究の際に、分担執筆者が作家作品についての原書資料をたどっていくと、光吉の連載には引用部分と思われる原文が多く見付かったという¹⁷。

引用文献を明記していないことは、現代の執筆倫理からいえば大きな問題である。当

時は引用に関する倫理観が未成熟であったのかもしれない。このような問題点もあるが、光吉の評論は引用部分をそのまま翻訳するだけではなく、さまざまな文献から重要だと思われる箇所を選び出し、情報を整理し、読者に分かりやすい形にまとめて紹介している点では評価される。

当時、絵本出版が隆盛期を迎えていたにもかかわらず、絵本の出版界においてこれほど綿密な資料を光吉のほかに誰も持っておらず、当時翻訳だということが誰にも推測できなかつた。そのことを考慮すると、この連載の資料的価値は高いと考えられる。

(3) 「絵本の世界から」

連載 普及版こどものとも 折り込みふろく「絵本のたのしみ」福音館書店
1984年4月-1985年3月(全10回)

① 光吉の絵本論の展開

「絵本の世界から」は、福音館書店の月刊絵雑誌のひとつ、「普及版こどものとも」の折り込み付録「絵本のたのしみ」に載った10回の評論である。10回だけの連載ではあるが、光吉の言葉で彼の絵本観が語られる機会となった。光吉の絵本観をいちばんはっきりと読み取ることが出来るのは、この連載においてである。この連載で、光吉は絵本表現を中心に独自の絵本論を展開している。先述した2つの連載「子どもの本の世界から—その文献と資料—」と「絵本の世界」は翻訳が主だった部分を占めていたが、この「絵本の世界から」は光吉のオリジナルな絵本評論が主となっている。

各テーマを具体的な絵本作品や作家・画家を提示して、すぐれた絵本とはどのようなものか、子どもとはどういう存在なのかという問いに迫っている。絵本の本質を置き去りにして有象無象に出版される絵本に対する批判と反省が、連載の随所にみられる。

「絵本のたのしみ」のタイトルは、表6のとおりである。

表6 「絵本のたのしみ」全10回リスト

| | |
|---------|--|
| 1984.04 | 「絵本の世界から1 大きい絵本と小さい絵本—絵本の大きさと形—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-4 福音館書店 (pp.2-3) |
| 1984.05 | 「絵本の世界から2 “トイ・ブック”の楽しさ(1)—かずかずの工夫とアイデア—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-5 福音館書店 (pp.2-3) |
| 1984.06 | 「絵本の世界から3 “トイ・ブック”の楽しさ(2)—かずかずの工夫とアイデア—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-6 福音館書店 (pp.2-3) |
| 1984.07 | 「絵本の世界から4 絵本のメディア(1)—ブラウンの多芸さ—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-7 福音館書店 (pp.2-3) |
| 1984.10 | 「絵本の世界から5 絵本のメディア(2)—コラージュ(貼り絵)—」普 |

| | |
|----------|--|
| | 及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-10 福音館書店 (pp. 2-3) |
| 1984. 11 | 「絵本の世界から6 絵本のメディア (3) —写真絵本—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-11 福音館書店 (pp. 2-3) |
| 1984. 12 | 「絵本の世界から7 絵本のカラー—単色と多色 (1) —」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1984-12 福音館書店 (pp. 2-3) |
| 1985. 01 | 「絵本の世界から8 絵本のカラー—単色と多色 (2) —」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1985-1 福音館書店 (pp. 2-3) |
| 1985. 02 | 「絵本の世界から9 絵本の文 (1) —文も書く画家たち—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1985-2 福音館書店 (pp. 2-3) |
| 1985. 03 | 「絵本の世界から10 絵本の文 (2) —絵も描く作家たち—」普及版こどものとも折り込みふろく「絵本のたのしみ」1985-3 福音館書店 (pp. 2-3) |

② 「絵本のたのしみ」テーマと内容の検討

この連載の10回のテーマは以下の通りである。絵本のできあがる過程をふまえ、表現メディアとしての絵本という視点を取り入れている。

- 1 大きい絵本と小さい絵本—絵本の大きさと形—
- 2 “トイ・ブック”の楽しさ (1) —かざかざの工夫とアイデア—
- 3 “トイ・ブック”の楽しさ (2) —かざかざの工夫とアイデア—
- 4 絵本のメディア (1) —ブラウンの多芸さ—
- 5 絵本のメディア (2) —コラージュ (貼り絵) —
- 6 絵本のメディア (3) —写真絵本—
- 7 絵本のカラー—単色と多色 (1) —
- 8 絵本のカラー—単色と多色 (2) —
- 9 絵本の文 (1) —文も書く画家たち—
- 10 絵本の文 (2) —絵も描く作家たち—

各テーマを論じる際に具体的な絵本作品や作家・画家を提示して、すぐれた絵本とはどのようなものか、子どもとはどういう存在なのかという問いに迫っている評論である。

たとえば、「2 “トイ・ブック”の楽しさ (1) —かざかざの工夫とアイデア—」のなかではトイ・ブックの歴史に触れた上で、「日本ではいまだに、「あれはおもちゃで、本ではない」と思っている人もいるようだが、しかしおもちゃで結構なのである。幼い子どもたちの生活はもともと遊びがすべてなのだから。そして、おもちゃだからこそ、子どもたちを容易に本になじませ、本とのふれあいをいっそう楽しいものにしてきているのである」と子どもの本質に触れる文章がある。

また、「6 絵本のメディア (3) —写真絵本—」では、「ただ漫然と撮った写真を、あれこれ並べただけでは、写真絵本は成り立たない。一枚一枚が構図もアングルも入念に考えられていて、前後のつながりまでしっかり計算されている、そんな写真でなければ本にはまとまらない」と写真評論家としての厳しい意見も交えながら、写真集と写真絵本の違いを指摘する。

さらに「7 絵本のカラー—単色と多色 (1) —」では、鮮やかなカラー印刷を「カラー時代である。週刊誌から、百科事典まで、文庫本から大型本まで、賑やかなカラーの氾濫である。」と評し、カラー印刷の歴史を語る。続く「8 絵本のカラー—単色と多色 (2) —」では、「こうしていまや絵本の多色化は全開のはなばなしさだが、色が絵本の魅力のすべてではないことはいうまでもない。色がどんなに豊富でも、絵がだめではしょうがないし、“カラーのためのカラー” なんてのは、およそ意味がない。(中略) 多色だろうと単色だろうと、かんじんなのは絵がすぐれていることだろう。しかも子どもたちは、黒一色のなかにさえ、さまざまな色を感じとる豊かな想像力の持ち主である」と指摘する。この当時、カラー刷りで次々に出版される絵本が氾濫していた。絵本の本質が置き去りにされている出版物に対して、鋭い発言が連載の随所にみられることも興味深い。

3. 第Ⅲ期のまとめ

(1) 絵本翻訳における理念と方法の変遷

— “右開きタテ組み” への編集から、“原書主義” へ

① 海外絵本翻訳の方法の変容

これまでみてきたとおり、光吉は1942年の『花と牛』でオリジナル絵本の翻訳を試みている。子どもたちの読みやすさ、日本語表記の特色に配慮し、左開き横組みの原書を右開き縦組みにして翻訳した。この組み直しの際に、絵を逆版にするという方法を見出した。逆版は、物語の展開上、絵を絵本の進行方向に沿うものにするために取られた操作であった。

その横向きの原書を縦組みに組み直すという方法は、戦後にかかわった〈岩波の子どもの本〉第1期出版にも受け継がれた。時代の限界のなかで、苦悩の多い試行錯誤を重ねて〈岩波の子どもの本〉が24冊完成した。

1950年代の岩波の絵本シリーズでは、海外絵本をひとつのユニフォームを着せて翻訳出版していたが、1960年代には原書どおりに出版しようという動きがあらわれた。その最も早い試みは、1961年にはじまった福音館書店の〈世界傑作絵本シリーズ〉である。この翻訳絵本シリーズの実現は福音館書店を率いる編集者、松居直の絵本観によるところが大きかった。

松居直は、〈岩波の子どもの本〉に大きな影響を受けて福音館書店で絵本出版をはじめた。それが、1956年にはじまる月刊絵雑誌「こどものとも」の発刊である。福音館書店は翻訳絵本にも着手し、〈世界傑作絵本シリーズ〉をはじめた。この〈世界傑作絵本シリーズ〉では、原書を忠実に再現する“原書主義”による翻訳をおこなった。〈岩波の子どもの本〉で原書を改変して絵本翻訳をおこなったことに対して、海外絵本の翻訳方法の見直しを図ったのである。

② 福音館書店の翻訳絵本〈世界傑作絵本シリーズ〉

〈世界傑作絵本シリーズ〉は、欧米のすぐれた絵本を、原書の判型・造本に忠実に再現した翻訳絵本シリーズである。1961年から原書主義に則って翻訳された〈世界傑作絵本シリーズ〉の4冊の絵本は、『100まんびきのねこ』（ワルダ・ガアグ）（図22）、『シナの五にんきょうだい』（クレール・H・ビショップ）（図23）、『アンディとらいおん』（ジェームズ・ドーハーティ）（図24）、『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』（バージニア・リー・バートン）（図25）である。いずれもアメリカの絵本出版黄金期¹⁸の作品で、古典となるすぐれた作品である。この最初の4冊は、家庭文庫研究会編で、石井桃子らの同研究会活動に、福音館書店の松居直が協力する形ではじまった。

このシリーズの出版によって翻訳絵本は、判型・ページ数が規格化されていた岩波書店〈岩波の子どもの本〉や、福音館書店の月刊絵雑誌〈こどものとも〉の限界を超えたとされる。現代絵本の先進国であった欧米の絵本の紹介は、各国の絵本観、子ども観を知る手掛かりにもなった。

この福音館書店の原書主義による絵本翻訳、また日本語の横書き表記の普及などが契機となり、原書を忠実に再現した“左開き横組み”のまま絵本を翻訳する方法が一般化

していった。〈岩波の子どもの本〉や〈こどものとも〉の示した新しい絵本観をさらに普及させ、絵本の発展に寄与したシリーズである。

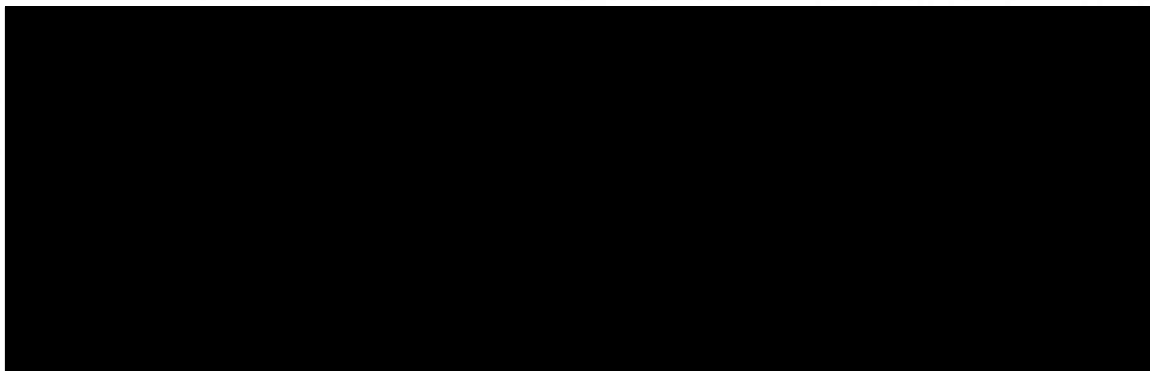


図 22 『100 まんびきのねこ』

図 23 『シナの五にんきょうだい』

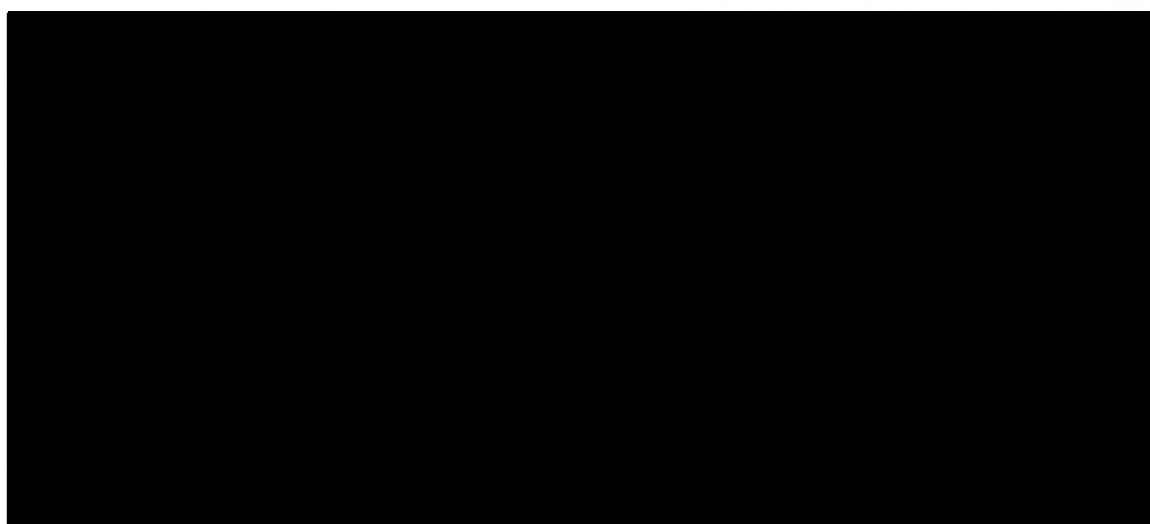


図 24 『アンディとらいおん』

図 25 『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』

③ “右開き縦組み”への編集から、“原書主義”へ

先述した原書主義による絵本翻訳〈世界傑作絵本シリーズ〉に触発され、後続の多くの出版社も原書を忠実に再現する方法を採るようになった。原書主義にもとづいた画期的な絵本出版は、〈岩波の子どもの本〉と同様、出版社や絵本作家・画家に大きな刺激を与えた。

結果的に、〈岩波の子どもの本〉は、原書のデザイン（判型・文字の大きさ・イラストの配置など）は絵本表現の重要な鍵となることを、反面教師として後世に伝えることとなった。現在では、〈岩波の子どもの本〉でおこなわれた右開き縦組みへの組み直しは、完全に否定されている。

〈岩波の子どもの本〉は時代の限界を抱え、試行錯誤の結果として出版された。そしてこの試行錯誤があったからこそ、絵本表現の本質を問う潮流がおこったのである。

筑摩書房の〈世界傑作絵本〉、岩波書店の〈岩波の子どもの本〉とその後の光吉の翻訳絵本について、原書と翻訳本を比較することによって、絵本を翻訳する方法が刻々とかわっていく過程を見出すことができた。海外翻訳方法の変遷を歴史的な視点からみつめ

るとき、“右開き縦組み”への組み直しという試行錯誤は、やはり通らなければならなかった道であったといえる。

本研究では、“右開き縦組み”への組み直しを早急に過去の誤りだと否定するところから脱し、本研究では丁寧にその方法を検討した。その結果、光吉が絵本を絵と言葉とが一体化してつくられる世界と認識していたことがうかがえた。光吉の手掛けたいくつかの翻訳絵本を検討していくなかで、絵本翻訳の理念と方法が徐々に成熟していく道のりが見えてきたのである。

(2) 絵本研究への挑戦—文献調査にもとづく絵本評論

① 情報の収集

第Ⅲ期の光吉は、特に児童書の評論という分野で活躍した。第Ⅲ期の業績調査にかかわる光吉文庫の資料発掘によって、光吉の評論は、膨大な情報の蓄積とその整理に支えられていることが明らかとなった。つまり光吉の翻訳なり執筆が、情報の収集と、情報の整理の両面で成り立っているといえる。

〈岩波の子どもの本〉で共に編集に携わった鳥越は、情報の収集についての貴重なエピソードを本人から聞いている。その話によると、光吉は外国の出版社から取り寄せる絵本ももちろんあったが、第二次世界大戦の戦火が激しくなってきた、日本に来ていた外国人が祖国に引き上げていく際に、彼らが二束三文で売った家財道具の中から、海外書籍を安価で手に入れていたということである。

鳥越は、のちに大阪府の国際児童文学館に12万点の蔵書を寄贈した子どもの本の蒐集家としてよく知られる人物である。〈岩波の子どもの本〉の編集時代に、光吉は鳥越に蔵書が何冊になったかと訊いたという。光吉によると蔵書が6,000冊を超えると、自分が何を持っているか分からなくなることから、鳥越にカードによる整理を勧めたという。また〈岩波少年文庫〉の表紙のヤレ紙を、カード整理にちょうど良い大きさにして、使っていたという¹⁹。

また、澤田も『子どもの館』連載時代に、光吉の文献収集についてエピソードを聞いている。

—文献の集め方など、光吉さんがこだわられたことはあったのでしょうか。

たとえばオックスフォード大学出版局というのは世界中にあるが、光吉さんはインドにある出版局の書籍が一番安いからと、インドから購入される。初版本かどうかもこだわらなかった。本そのもの、情報が手に入ればいいという人だった。戦争が激しくなって外国人が帰国するとき、家財道具を安く売り払っていくが、そのなかにある児童書を手に入れていた。書込みや、落書きがあっても意に介さなかった。情報の中身そのものを大切にしておられたようだ。

(2011年8月 澤田精一インタビューより)

さらに澤田は、光吉が本をただ集めていただけではなく、選んで集めていたことを強調している。

——〈子どもの本〉の編集についてお話を聞かれたことはありますか。

戦後の絵本史は岩波書店の〈岩波の子どもの本〉の企画から始まるが、岩波書店の石井さんと絵本コレクターの光吉さんが中心になって編集したといわれている。お二人とも戦中に日本少国民文化協会文学部会の幹事をなさっていたので、既に面識があったのかもしれない。よく光吉さんは「絵本コレクター」と言われているが、その言葉には少しひっかかる。コレクターというと集めていただけというニュアンスを感じるが、光吉さんはただ漫然と児童書と文献を蒐集しているわけではなく、選んで集めている。それは光吉文庫を見れば歴然としている。

(2011年8月 澤田精一インタビューより)

鳥越、澤田両氏によるインタビューから、光吉の本の蒐集は、情報を収集する意味があったことが明らかとなった。では、光吉は情報をどのように処理したのだろうか。

② 情報の整理

特筆すべきは、光吉が資料の収集だけではなく、それらを整理・分類し、情報カードを作成していたことである。その情報カードに整理された情報のソースは、国内外の新聞、雑誌、研究書などであった。洋書や資料の蒐集は戦前からはじめ、戦後の資料収集に関しても新聞記事から専門書に至るまで綿密に行っている。光吉文庫の膨大なスクラップ資料が、それを裏付けている。「毎日、読まなくてはいけないものがたくさんあるから、旅行にいく暇がない」と澤田に語ったほど、光吉にとって資料への目配りと整理は生活の一部となっていた。

では、光吉の情報整理の方法のひとつ、情報カードはどんなものなのであろうか。

③ 情報カードの意味

光吉文庫にあるこれらの情報カードは児童文学作家、絵本作家・画家などの情報を整理したものだということが明らかになった。情報カードは2種類に大別されていて、ひとつは作家別にまとめられた作品のリスト（邦訳情報を含む）、もうひとつは作家・画家別にまとめられた書評や研究文献のリストである。

光吉はカードにタイプライターで情報を打ち込み、次々に出版される作品や雑誌や新聞の書評、研究書をもとに、随時、情報を追加していた。長年にわたって、膨大な量の情報カードを作りつづけ、しかも新たな情報が入るたびに加筆修正して、情報を整理していたのである。

元編集者の澤田は、『子どもの館』での光吉の連載に立ち会い、実際に情報カードを見せてもらっている。

原稿をいただきに何度となくお家に通った。玄関から入ると、長い廊下があってその両側の壁が床から天井まで書棚。その廊下が尽きるところに階段があって、二階に書斎がある。書斎の机の後ろにまた書棚があり、そこに絵本関係の書物が並んでいる。

書齋の押入れにはたくさんの小さなボックスがあり、その中には作家別、作品別の情報が書き込まれたカードがぎっしり詰まっていた。机の右下には雑誌とか新聞が重ねられていて、それを整理しておられた。ボックスからカードを持ってきては、タイプライターで打ち込んでおられたようだ。

——その当時の評論は、論者の斬り口やスタンスが強くあらわれるものが多かったと思いますが、それに対して光吉さんのお仕事は、むしろコツコツと調査を積み重ねていく、研究的色彩の濃いアプローチです。その時代としては、珍しいタイプの仕事ですが、そのような手法をどこで身に付けられたのでしょうか。

やはり若いころに新聞記者をされて、身につけた手法だったのではないか。それから光吉さんのお父様、光吉元次郎さんは頼山陽の『日本外史』（岩波書店 一八七三年）の注釈を手がけた研究者だった。緻密な調査へのこだわりは、お父様譲りかもしれない。舞踊や写真の評論も Who's who のように、『子どもの館』と同じスタイルで書かれている。

光吉さんは「この本はよかった」という主観的な評価ではなく、さまざまな文献に当たりながら、文化的な背景や時代軸に照らしあわせてうえで、一冊の本を客観的に評価されていたように思う。

——光吉さんはたくさんの情報にアクセスできる立場だからこそ、エッセンスを抽出して伝えるという役割を担っておられたのですね。そのように文献や資料を整理することでどういうものを作りたいと思っておられたのでしょうか。出版するというような目的があったのですか。

『子どもの館』連載第一回目に書いておられるのだが、作者や作品を研究するとき、あちこち文献を探し、作者の経歴や作品がどのようにできたかなどを個人で調べるが、例えばバートンについて調べたいと思った時に、何をみたらいいかなかなか分からない。そういう時に、どこを探したらいいか分かるような資料を作りたいと思っておられたようだ。光吉さんは次々にでてくる作家、画家、作品、文献を何十年もかけて網羅的に追い、情報を整理されていた。

これだけの文献があるのに、それを読まずして、ただ無作為に翻訳や出版をすることに対する批判もあったのではないか。しかし何よりも、光吉さんは情報を探して一つ一つ整理していくのが本当に楽しかったようだ。情報は常に新しいものが出てきて動いている。光吉さんがやろうとしていたのは、まさに終わりのない仕事。この作業を共同研究などで引き継いで、半永久的に更新できるデータベースを作れたらいいのではないか。

いくつかの図書館では、『子どもの館』の光吉さんの連載ページをコピー製本して、レファレンスに役立てられていたと聞いた。光吉さんの没後、この連載の単行本化の話もあるにはあった。甲義子夫人がそれを少し形にしようと、大学ノートに連載のコピーを貼って情報を加筆修正したものが光吉文庫にあるはずだ。

(2011年8月 澤田精一インタビューより)

〈岩波の子どもの本〉で共に編集したいぬいは、光吉の蔵書とカードについて以下のように語る。

難問といえば、企画の段階でも、原書さがしさえ容易でなかった（丸善で絵本の展

示会が華やかに開かれるのは、十年さきのことだった)。外国の絵本の個展については知識の深かった石井桃子さんも、絵本の現物をさがし求めて、日比谷のACCに足繁く通い、戦前から子どもの絵本に造詣の深かった光吉夏弥さんのカードと蔵書が、唯一の救いとなった。

いぬいは、光吉がカード整理法によって多くの情報の蓄積を持っていたことを証言している²⁰。そして、この情報カードが〈岩波の子どもの本〉の選書に貢献したというのである。

③ 光吉コレクションのゆくえ

光吉が蒐集した海外の児童書、研究書などは、業界では通称、光吉コレクションと呼ばれていた。光吉の没後、未亡人の甲義子は、このコレクションをどこかで生かしてもらえないだろうかと思いついたという。

澤田は甲義子夫人から、寄贈先の選定について相談を受けている。

——光吉さんが亡くなったあと、甲義子（かよこ）夫人が光吉コレクションの行先を澤田さんに相談なさったと聞きました。鳥越さんの話によると、甲義子夫人はもともと週刊読書人の編集者だったそうですが、光吉コレクションの設立の経緯についてお聞かせください。

『子どもの館』の連載が終わっても、光吉さんとのお付き合いは続いた。編集者は担当を離れても、一度できた関係を大切にしていくなさってほしいと僕は思っている。光吉さんからこれとこれを調べてほしいと手紙がきて、福音館の資料室で調べてコピーを取って送るということをやった。光吉さんの没後、まもなく甲義子さんも病に倒れられ、光吉さんの本や資料をどこか役立ててくれる場所がないかという相談を受けた。そこで、寄贈先については研究機関のほうがいいと申し上げた。白百合女子大学には児童文化研究センター・大学院もあり、研究者もそろっている。当時、児童文化学科教授の神宮輝夫先生に相談し、光吉文庫の設立がかなった。

(2011年8月 澤田精一インタビューより)

白百合女子大学児童文化研究センター、光吉文庫の設立経緯は、宮崎麻子による「光吉夏弥一人物と子どもの本の仕事 神宮輝夫先生、澤田精一先生に聞く」²¹に詳しい。

子どもの本の歴史は、過去に出版された子どもの本によってしか、たどることはできない。かつての光吉コレクションが残してあるからこそ、本研究における絵本翻訳の方法を検討することも可能であった。子どもの本が資料として残されることの意義を、光吉は誰よりも深く理解していたのではないか。甲義子夫人は光吉の情報収集と整理をいちばん間近でみてきており、その重要性を理解していた。

④ 第Ⅲ期のその他業績

第Ⅲ期の他業績としては、ほるぷ出版の『世界むかし話』シリーズ（1979年10月～）では瀬田貞二と共に編集と翻訳を手がけている。長年、集めていた各国の民話、説話、昔話をもとに編まれたシリーズである。光吉が翻訳を手がけたのは、東南アジア、イン

ド、太平洋諸島の国々に伝わる昔話の再話である。このシリーズは10年後に改版、再版された。

『ネコ 猫 ねこ—世界中のネコの昔ばなし』(1989年5月)は光吉の晩年、自宅で何匹ものネコを飼うというほどのネコ好きだったことと無関係ではあるまい。没後の出版となったが、ネコにまつわる世界の昔話を編んで上梓した。ネコというひとつのテーマで民話を集めるという発想も独創的である。1冊の本になるほどの膨大な資料収集にも驚かされる。光吉の古今東西の昔話への造詣の深さが垣間見られる。

⑤ 第Ⅲ期業績のまとめ

第Ⅲ期は、光吉の長年にわたる海外児童書及び児童書資料の蒐集が、資料研究とその資料をもとにした評論として結実した時期である。舞踊や写真という芸術に造詣が深く、日本のみならず世界各国の児童書に通じ、その文学史的背景も綿密な調査を続けてきた光吉にならではという仕事ぶりである。文献を翻訳するにしても、情報をただの情報として提供とするのではなく、文化的素養、地道な資料の集積・整理をもとにした自分なりの絵本観を確立していた。

光吉の絵本評論は、戦前からの海外絵本の蒐集にはじまり、地道に集められた文献資料の整理・分類に基づいた綿密なものである。評論には、日本ではまだ翻訳されていない作品の紹介、知られていない作家・画家の経歴や作品評価など多岐に渡る情報を載せている。しかも大量な情報を精査し、読者に応じて提供していた。また、作品評価を個人の好みにとどめることなく、作品が生まれた背景や本国での評価を調べている。作家・作品を評価する際に、時代の縦軸、横軸をいう視点をもっていた。縦軸とは、つまり絵本の歴史のなかでこの絵本がどう評価できるかという視点、そして横軸とは、同時代に活躍する作家・画家、出版されている作品のなかでこの絵本がどう評価できるかという視点である。

現在の海外絵本翻訳の多くが、訳者や編集者の単なる好みや、偶然の出会いだけで、翻訳されるという。また、賞を獲った作家・画家の作品であればとばかりに、作品ごとの吟味をしないまま、その作家・画家の作品を翻訳してしまう場合もある。そのような翻訳のあり方によって、子どもたちにすぐれた作品が手渡されるとは考えられない。

その海外絵本を翻訳する意味、つまり日本の子どもたちがこの作品に出会う必要があるのか、どんな点ですぐれていると評価できるのか、本国での評価、世界各国の同時代の作家作品と比較してどのような評価ができるのか、つまり、1冊の絵本を日本で翻訳する意味を問うところまでが必要な観点であると考えられる。

第Ⅲ期の光吉の業績は、以下の3点において研究的資質を持つと考えられる。

1. 膨大な原書・文献資料の収集
2. オリジナルな視点に基づく情報の整理・分類
3. 歴史的な視点をもって行われる作品や作家・画家の評価

光吉のおこなった情報の収集とその整理は、児童書の歴史をひもとく際に必要不可欠な基礎研究だといえる。光吉の業績は単なる評論の域を出て、研究の領域にあると考えられる。これは、日本の戦後絵本史における絵本研究の萌芽といえよう。光吉は“絵本

学”の先駆者として、礎を築いたといえる。

- 1 ジョン・バーニンガム 灰島かり訳『わたしの絵本、私の人生』ほるぷ出版 2007年
- 2 日本での翻訳絵本は、『ボルカ はねなしガチョウのぼうけん』（ジョン・バーニンガム作 木島始訳 ほるぷ出版 1993年）である。
- 3 「ジョン・バーニンガム年表」前掲書1 (pp.221-223)
- 4 ブライアン・オルダーソン「ジョン・バーニンガムの絵本」前掲書1 (pp.9)
- 5 1『きえた犬のえ』、2『まよなかのはんにん』、3『なくなったかいものメモ』、4『きょうりゅうのきって』、5『かぎはどこだ』、6『ゆきの中のふしぎなできごと』マージョリー・W・シャーマット文、マーク・シマント絵、光吉夏弥訳 大日本図書 1982年（全て同じ発行日）
- 6 安藤美紀夫「幼年童話」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第2巻』大日本図書 1993年
- 7 光吉郁子という人物について調査を行ったが、光吉との関係性を明らかにする手がかりは得られなかった。（2011年11月現在）
- 8 大日本図書の児童書編集者、山本陽子さんに2011年6月にお話をうかがった。
- 9 鳥越信「序——絵本を考える」『絵本の歴史をつくった20人』創元社 1993年 (p.12)
- 10 2002年9月に筆者が岩波書店児童書編集部の編集者、若月万里子氏から聞いた話による。
- 11 注10に同じ。
- 12 中多泰子「子どもの館」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第2巻』(pp.547-548)
- 13 澤田精一「光吉夏弥さんのこと」河田篤子編『光吉夏弥文庫目録』国立音楽大学附属図書館 1993年 (p.7-8)
- 14 23回の連載には、イラストレーターとライターとの連載の区切りに、息抜きとして児童書にかかわるクイズ遊びを掲載している。掲載されたクイズは、アメリカのラジオ番組で人気だったクイズをまとめた本から選んだと書いている。光吉は児童文化全般に造詣が深かった。また、遊び心旺盛な性格がうかがえる。
- 15 加藤優子「月刊絵本」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第2巻』(pp.535-534)
- 16 光吉夏弥『絵本図書館—世界の絵本作家たち—』ブック・グローブ社 1990年
- 17 鳥越信「あとがき」『絵本の歴史をつくった20人』創元社 1993年 (p.272)
- 18 アメリカでは、第一次世界大戦後、印刷にオフセット多色刷石版が広く使われ始めてから絵本出版が盛んになった。1920年から1930年代はアメリカ絵本出版の黄金時代と称されている。（国立国会図書館国際子ども図書館会館10周年及び国民読書年記念展示会「絵本の黄金時代—1920~1930年代子どもたちに託された伝言」国立国会図書館国際子ども図書館 2010年 (pp.6-27)）
- 19 2000年の春、筆者が鳥越に聞いた話である。その時代にはコンピューターこそなかったが、現代に生きていたら、光吉は必ずやコンピューターを利用して資料整理をしたであろうと鳥越は語っている。
- 20 いぬいとみこ「海外の絵本に魅せられて」『別冊太陽 45 絵本』平凡社 1984年 (pp.127-132)
- 21 宮崎麻子「光吉夏弥—人物と子どもの本の仕事 神宮輝夫先生、澤田精一先生に聞く」『白百合児童文化XIV』白百合女子大学児童文化学科児童文学・文化専攻研究室 2005年 (pp.17-35)

おわりに——日本絵本史における光吉夏弥の果たした役割

(1) 本研究の成果—絵本翻訳・評論分野でのパイオニアとしての光吉夏弥

第Ⅰ期から第Ⅲ期までの光吉業績を検討した結果、光吉を絵本翻訳と絵本評論におけるパイオニアだと評価することができる。その根拠は、以下2つの日本絵本史における光吉の役割に集約される。

① “どの絵本を、どのように翻訳するのか”

—生産の場のゲートキーパー（門番）のひとりとして

第Ⅰ期、第Ⅱ期の光吉業績の翻訳に着目すると、〈岩波の子どもの本〉以前に、光吉は翻訳絵本づくりを試みていたことがわかる。光吉は1942年に、筑摩書房〈世界傑作絵本〉においてアメリカの絵本2冊を翻訳した。その選書は、戦前からの海外絵本の蒐集に端を発し、地道に集められた文献資料の整理・分類に基づいていた。

“どの絵本を”という問いに、光吉は歴史をふまえた作家・作品評価の視点からの選書眼で応えている。それは、時代の縦軸、横軸のなかで一つの作品を厳しく吟味するまなざしと言い換えることもできる。縦軸とは、絵本の歴史のなかでこの絵本がどう評価できるかという視点である。さらに横軸とは、同時代に活躍する作家・画家、出版されている作品のなかでこの絵本がどう評価できるかという視点である。

戦中に翻訳した最初のオリジナル絵本の翻訳では、「絵本とは絵と言葉が一体となって、物語を展開するもの」という新たな視座から絵本翻訳をおこなっている。そこでは、英語と日本語の表記の進行方向のちがいに着目して、「左開き横組みの原書を、右開き縦組みに組み直す」翻訳方法を発見した。組み直しの際に、物語の展開と絵本の進行方向が矛盾しないよう、絵本の絵の一部を逆版にした。“どのように翻訳するのか”という問いに、原書レイアウトの再構成という方法で応えている。

戦後に新しい絵本の流れをつくった〈岩波の子どもの本〉でも、子どものための本としての確かな選書と、「左開き横組みの原書を、右開き縦組みに組み直す」翻訳方法の提示で中心的な役割を果たした。ただし、「左開き横組みの原書を、右開き縦組みに組み直す」翻訳方法は、原書のレイアウトを破壊していたため、反面教師として、「絵本とは何か」「絵本表現とは何か」という命題をなげかけた。

現在という地点から翻訳絵本の歴史を総括するとき、「左開き横組みの原書を、右開き縦組みに組み直す」翻訳方法は否定されるべきものである。しかし〈岩波の子どもの本〉は時代の限界をかかえながら、子どもたちにすぐれた絵本を、読みやすいかたちでという理念を、具体的な絵本の形にした斬新な出版であったことはまちがいない。

戦中から戦後につながっていく翻訳絵本の歴史のなかで、光吉は“どの絵本を、どのように翻訳するのか”という問いと向き合い、翻訳絵本をリードしていた。光吉は、戦中戦後の日本絵本史における「生産の場のゲートキーパー（門番）のひとりとして」の役割をになっていたといえる。

② “絵本をどう評価するのか” —消費の場のゲートキーパー（門番）のひとりとして

第Ⅲ期の光吉業績のうち評論に着目すると、この時期は光吉が絵本翻訳から評論へと

軸足を移していることがわかる。言い換えれば、おもに児童書の翻訳家から評論家としての役割を果たしている時期ということである。評論家とは作家作品をどのように評価するのか、また、子どもにとって良い絵本とは何かを見極める役割を負っているといえる。〈岩波の子どもの本〉の導いた新たな潮流は、1960年代から1970年代の終わりごろには、ますます大きな動きとなって絵本の隆盛期を形づくるのだが、「絵本とは何か」「絵本表現とは何か」という命題をさらに深く掘り下げる時代が到来する。“絵本をどう評価するのか”の問いかけに、光吉は多くの絵本評論で海外絵本に見出される絵本表現の豊かさ、世界の絵本研究を発信することで応えている。

光吉の評論は、戦前から収集された多くの海外児童書や研究書などに裏付けられたものであった。しかも情報をただ恣意的に集めるだけではなく、それらを整理し、取捨選択していたのである。光吉がおこなった情報の収集と整理にもとづく評論は、研究の素地であると認められよう。“絵本学”という言葉が未だ存在しなかった時代に、資料に依拠した確かな基礎研究をもとに評論がおこなわれていたことは、特筆に値する。光吉の評論は、日本における絵本学の礎石ともいうべきものである。光吉は絵本の「消費の場のゲートキーパー（門番）のひとりとして」、絵本評論・研究を展開する役割をになっていた。

(2) 本研究の成果

① 本研究の成果

本研究の成果としては、以下3点を挙げることができる。

1. 光吉の全業績を調査し、日本絵本史の視点から考察を行った。
2. 光吉が翻訳を手掛けた絵本を原書と比較検討し、戦中戦後の絵本翻訳の方法その変遷を明らかにした。
3. 光吉文庫の資料と光吉の児童文学・絵本の評論の関係性を見出した。

本研究では、戦中戦後の混乱期の日本絵本史に大きな業績を残しながら、これまであまり取り上げられることのなかった光吉夏弥という人物に光をあて、その業績と日本絵本史での役割について考察した。とくに、戦中の光吉の業績のなかには、戦後につながる翻訳絵本や評論が存在しており、それを掘り起したことで、戦後の絵本の出発点とされる〈岩波の子どもの本〉の前史を明らかにできたことは、本研究における大きな成果であった。

光吉が戦前から海外絵本の新しさと魅力に着目し、日本の絵本出版に取り入れる必要性を説いていたことも分かってきた。これまでの鋳型にはめ込む子ども像を脱し、新たな時代を象徴する子ども像を、光吉は翻訳絵本に見出していたのかもしれない。戦中から戦後にかけて、光吉が手掛けた原書と翻訳絵本を比較検討することで、絵本翻訳の方法の変遷とその問題点を明らかにすることができた。

〈岩波の子どもの本〉以降に各出版社から多くの翻訳絵本が出版され、後進の翻訳者も育ってくるころになると、光吉の役割の主軸は、絵本翻訳から絵本評論へと移った。それは戦前から国内外の豊富な文献収集のうえに、光吉の緻密な情報整理があったからこそできる評

論執筆であった。光吉は文献調査に基づく情報整理によって、時代の縦軸と横軸を見据えた作家・作品を評価する独自の視点を得ていたといえる。まだ「絵本学」という絵本を対象とする研究が存在していなかった時期に、光吉は文献調査にもとづく評論をおこなっていたのである。これらの光吉の評論は、絵本学の先駆的な取り組みとして評価できる。

② 研究の独創性

本研究の独創性は、以下の4点である。

1. 日本絵本史研究では未だ調査されていない光吉夏弥という人物を取り上げ、詳細な業績調査を行った。
2. 戦中における児童文化統制、及び戦後の占領期における光吉業績を明らかにし、その役割について言及した。
3. 光吉業績のうち翻訳絵本について、原書と翻訳本を比較することによって、日本における絵本翻訳の変遷を明らかにした。
4. 光吉業績のうち絵本評論に着眼し、絵本学の先駆としての役割を見出した。

以上のような独自性を持つ研究の成果として、戦中から戦後の絵本史の全貌を概観するとき、光吉は欠くことのできない極めて重要な存在であることが明らかとなった。光吉はまさしく、「現代絵本」の誕生に立ち会った先駆者である。

本研究における光吉の人物像と業績の解明及び、絵本史上の役割の検討は、「現代絵本」の出発点を照射し、日本絵本史に新たな意味を付与する意義を持つものである。

(3) 本研究の課題

本研究の課題は、以下3つ残されている。

1. 光吉業績における翻訳絵本のうち、英語から翻訳された訳文の検討。
2. 戦前からのすべての翻訳絵本における翻訳方法の検討。
3. 光吉業績における児童文学翻訳の位置づけの検討。

① 光吉業績における翻訳絵本のうち、英語から翻訳された訳文の検討。

絵本の絵をどのように取り扱ったかを中心に検討したため、原書の英文をどのように翻訳しているかを検討することが不十分であった。光吉の翻訳は、『ひとまねこざる』シリーズ、『ガンピーさんのふなあそび』『おおきいツリーちいさいツリー』など、ロングセラーの作品が多い。日本の子どもたちに受け入れられ、読みつがれる要因として、原書の魅力もさることながら、光吉の訳文の魅力もあるはずである。

光吉の訳文は、言語感覚にすぐれ、厳選された無駄のない言葉である。押しつけがましくなく、どこことなくユーモラスで、あたたかく、やわらかい雰囲気をかもしだす訳文である。光吉の訳文は、絵本の絵と同じくさらに詳しく検討されるべきである。

② 戦前からのすべての翻訳絵本における翻訳方法の検討。

1942年に筑摩書房の〈世界傑作絵本〉『花と牛』の底本が見つかったことは、この研究の大きな成果であった。他の翻訳絵本に関しても底本だと断定できないにしても、原書と思われる版と、翻訳本を比較検討されるべきである。とくに、海外絵本が右開き縦組みに組み直しがおこなわれた時期においては、光吉による翻訳絵本だけでなく、日本で翻訳された全ての翻訳絵本において検討が必要である。同時代の絵本翻訳の方法を検証することで、光吉の翻訳方法の独自性と、意図がはっきり見えてくるであろう。さらに、光吉以前の絵本のレイアウトの検討をおこなうことによって、絵本史における光吉の役割がよりいっそう明らかになると考えられる。

③ 光吉業績における児童文学翻訳の位置づけの検討。

光吉の全業績を見渡しても明らかなように、翻訳絵本と同時に、多くの児童文学作品の翻訳を手掛けている。英米児童文学という視点から光吉業績をながめることができれば、翻訳児童文学の流れのなかで光吉の役割が明かされるのではないか。

以上の3つの課題を見据えて、今後の研究を深めていく。

(4) 本研究を終えて

筆者は光吉が活躍したその時代を生きてはいないため、実感を伴って時代の真実をつかみとることはできない。しかし時を経て、その時代に対してある距離をおいて、絵本史の一局面を総括することもできるのではないかと考えている。本研究において、原書と翻訳絵本を実際に見比べてみることはじめて、時代の限界のなかで試行錯誤を重ねてきた先達のたゆまぬ努力を垣間見ることができた。

〈岩波の子どもの本〉において海外絵本を右開き縦組みに組み直したことは、とかく否定されがちである。もちろん否定されるものであることには間違いないが、その方法や理念を詳細に検討せずして、当時の方法を批判することは不遜である。戦後の時期からは想像もつかないほどの格段の進歩を遂げた現代において、私たちは先達の遺した仕事に敬意をもって振り返る姿勢を忘れてはならない。

戦中の児童文化統制や、岩波初版本『ちびくろ・さんぼ』の絶版問題など、児童文学史・絵本史上の「負の遺産」がある。それらをなかったものとして葬り去るのではなく、ひとつの事実として振り返り、試論の遡上に載せることは、歴史から教訓を得るために必要な手続きである。断罪論からではなく、歴史としてとらえ直す視点こそ重要であろう。

鳥越は絵本史研究に関して、以下のように述べている。

—「絵本史に限ったことではないが、歴史を著述するという作業は、単に歴史的対象を羅列することではない。必ずその筆者のよって立つ視点からの切り口がなければならない。絵本史の場合も、その筆者のもつ絵本観・絵本論が密接不可分な関係として存在する。もちろんそれは、常に仮説といってもいいものだが、その立場がない限り歴史を切り取ることはできない」

本研究において、筆者がどれほど「よって立つ視点」を持てたかどうかは心もとない限りであるが、鳥越の指摘する「その筆者のもつ絵本観・絵本論」が徐々に形づくられてきたと感じている。子どもの本の世界における光吉の足跡をたどることによって、自分のよって立つ絵本観・絵本論を見つめ直すことができたと思う。

戦時期、戦後まもない時期に、絵本表現に魅了された人物がいた。その人は凝り性で、頑固者で、豊かな教養をもつ文化人であった。子どもの本の仕事は、労苦の割には評価の少ない仕事、そして目立たない仕事である。戦中、そして戦後も、子どもの本、特に絵本には、言葉は悪いが低俗というイメージが付きまとっていた。にもかかわらず、光吉は子どもの本や資料を地道にこつこつと集め、その情報を整理し続けていたのである。

私は光吉の生きた証を書き留めずにはいられなかった。これほどまでに子どもの本に情熱を注ぎ、現代の絵本出版の原点をつくった人々がいたということを忘れてはならないと感じた。出版された絵本、残された評論をたどることによって、光吉夏弥、その人と会うことができたような気がしている。歴史のなかにうずもれた、光吉という人物を掘り起こす機会を与えられたことを、心から感謝している。本研究には長い時間がかかったが、その長い時間があったからこそ、さまざまな人々と出会い、研究対象ともじっくり向き合うことができた。光吉研究が筆者を、研究を志す者としても、そして人間としても成長させてくれたといっても過言ではない。本研究を研究の第一歩として、今後も絵本研究に取り組んでいきたいと願う。

謝辞

本研究の進捗をいつもあたたかく見守り、励ましてくださった甲南女子大学人間科学部総合子ども学科の島田博司教授に感謝申し上げます。島田教授の専門分野とは異なる私の研究を、博士後期課程入学当初から熱心に聴いてくださり、言語化していく術をいくつもお教示くださいました。論文を構成する方法、思考の枠組みを整えることの重要性をご指導くださいました。児童文化財、殊に絵本の研究は未踏の地であり、研究として成り立つかどうか分からない状況にもかかわらず、島田教授のお支えがあったからこそ、ひとつの形として本研究をまとめることができたと思っております。

一色伸夫教授には、本研究の子どもメディア研究としての意義をご指摘いただき、研究をすすめるあいだ勇気をいただき続けました。

香川豊教授は、本研究の資料調査の緻密さと正確性をつねに励ましてくださいました。本研究に於いて地道に資料調査をすすめる際、先生のお言葉が大きなエネルギーとなりました。

光吉夏弥についての手がかりが少ないなか、インタビューにご協力くださった元福音館書店編集者の澤田精一様、青山学院大学名誉教授の神宮輝夫先生、児童文学翻訳家のみつじまちこ様にも心からの感謝を申し上げます。

資料閲覧にご協力くださった大阪府立中央図書館国際児童文学館（旧大阪国際児童文学館）の皆様、白百合女子大学児童文化研究センターの石井直人教授、佐々木裕理子助教、ならびに助手の皆様にご感謝申し上げます。資料の発掘のための文献調査を主とする私の研究を、資料の提供や文献複写などさまざまな形で支えてくださいました。

石川晴子様、元聖和大学大学院の正置友子先生には、絵本研究の志をお教えいただき、いつも心から励ましてくださったことに感謝いたします。

元早稲田大学教授の鳥越信先生は、私が絵本研究をはじめの機会を与えてくださった恩師です。鳥越先生にご指導いただいた修士論文『絵本作家 H. A. レイの作品世界——キュリアス・ジョージ・シリーズについての一考察』（聖和大学大学院 2002 年度）をはじめとして、その後の研究と執筆活動をご指導いただきました。決して声高に何かを教えることはなく、ご自分の書いたものや行動を通して、研究者としての姿勢を示してくださいました。鳥越先生から、子どもの本を資料として保存することの重要性、正と負の両面から現象をみつめて歴史を記述することの大切さ、そのような歴史記述から教訓を汲み取っていく姿勢、数え上げればきりがなほのこを教えていただきました。本研究をすすめるなかでも、鳥越先生の卓越した視点、時代の移りかわりに左右されることのない一貫した論説に、多くのことを気付かされると同時に、先生の児童文学研究にける熱い思いを改めて知ることができました。鳥越先生の学恩に報いるべく、本研究を出発点にして、今後もあせらずたゆまず研究に精進したいと願っております。

最後に、あわたたしい生活のなかで研究する私を、いつも心身ともに支えてくれた夫の真也、息子の祐太と尚稔に、心からありがとうを伝えたいと思います。

2012 年 1 月 生駒幸子

引用・参考文献一覧

1. 阿部仁三『総力戦と国民教育』目黒書店 1942年
2. 阿部紀子『「子供が良くなる講談社の絵本」の研究—解説と細目データベース』風間書房 2011年
3. 赤澤史朗「戦中・戦後文化論」『岩波講座 日本通史』第19巻 岩波書店 1995年
4. 赤澤史朗・北河賢三『文化とファシズム』日本経済評論社 1993年
5. 赤澤史朗他編『戦時下の宣伝と文化（年報・日本通史 第7号）』現代史料出版 2001年
6. 浅岡靖央『児童文化とは何であったか』つなん出版 2004年
7. 浅岡靖央「戦争政策としての少国民文化—少国民文化政策と日本少国民文化協会」『子どもの文化』子どもの文化研究所 2010年8月
8. 浅岡靖央「〈児童読物改善ニ関スル内務省指示要綱〉の成立」『児童文学研究』第27号 日本児童文学学会 1994年
9. 浅岡靖央「〈児童読物改善ニ関スル内務省指示要綱〉にいたる経緯」『児童文学研究』第23号 日本児童文学学会 1991年
10. 浅岡靖央「児童文化から少国民文化へ—戦中期児童文化政策に関わる指摘と論点」『国際児童文学館紀要』第20号 財団法人大阪国際児童文学館 2007年
11. 浅岡靖央「日本児童文化協会の創立と前半期の活動」『児童文学研究』第42号 日本児童文学学会 2009年
12. Barbara Bader *American Picturebooks from Noah's Ark to the Beast within* Macmillan 1976
13. John Burningham 灰島かり訳『わたしの絵本、私の人生』ほるぷ出版 2007年
14. エリザベス・ヘイ ゆあさふみえ訳『さよならサンボ—『ちびくろサンボの物語』とヘレン・バナマン』平凡社 1993年
15. 江藤淳『閉ざされた言語空間』文藝春秋 1994年
16. 本田和子「絵本」日本児童文学学会編『日本児童文学概論』東京書籍 1976年
17. 本田和子『児童文化』光生館 1973年
18. ベッティーナ・ヒューリマン 野村滋訳「第十七章 アメリカの子どもの本の特徴」『子どもの本の世界 300年の歩み』福音館書店 1969年
19. 藤本朝巳『絵本はいかに描かれるか—表現の秘密』日本エディタースクール出版部 1999年
20. 藤本朝巳『ぞうくんはどっちを向いている?』フェリス女学院大学 2001年
21. 藤本朝巳「第18章 絵本研究」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』ミネルヴァ書房 2002年
22. 藤本朝巳『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部 2007年

23. 古田足日『児童文化とは何か』久山社 1996年
24. 古田足日『子どもと文化』久山社 1997年
25. いぬいとみこ「海外の絵本に魅せられて」『別冊太陽 45 絵本』平凡社 1984年
26. いぬいとみこ「「岩波の子どもの本」こぼればなし」『月刊絵本』「特集 岩波の子どもの本」盛光社 1974年2月
27. 犬飼和雄「光吉夏弥」日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍株式会社 1988年
28. 石井桃子「石井桃子氏にきく「岩波の子どもの本」の頃」『月刊絵本』「特集 岩波の子どもの本」盛光社 1974年2月
29. 石井桃子・いぬいとみこ・鈴木晋一・瀬田貞二・松居直・渡辺茂男『子どもと文学』福音館書店 1967年
30. 石井桃子年譜・著作リスト『石井桃子集7』岩波書店 1999年
31. 石川晴子「第15章 翻訳絵本の十五年間—西から東から」鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ』ミネルヴァ書房 2002年
32. 石川晴子「第2章 占領下の翻訳絵本—アメリカからの新しい絵本の波」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』ミネルヴァ書房 2002年
33. 石澤小枝子「第1章日本の子ども絵本略史—「こどものとも」成立の背景：第2節「こどものとも」発刊まで」三宅興子編著『日本における子ども絵本成立史—「こどものとも」がはたした役割』ミネルヴァ書房 1997年
34. 伊藤元雄「あとがきにかえて」光吉夏弥『絵本図書館—世界の絵本作家たち』ブック・グローブ社 1990年
35. 岩波書店「親から子へ、愛されて50年 岩波の子どもの本」2003年
36. 「少年少女の読み物百種」『図書』岩波書店 1950年5月
37. 「少年文学」『図書』（臨時増刊14号）岩波書店 1950年12月
38. 「少年文学」『図書』（特集号15号）岩波書店 1950年12月
39. 特集「子どもの本」『図書』第50号 岩波書店 1953年11月
40. 岩波書店編集部『グラフィック・レポート別冊 写真でみる岩波書店80年』岩波書店 1993年
41. 岩波書店『岩波書店八十年』岩波書店 1996年
42. 児童向出版物研究会（岩波書店）『児童向出版物について』 1953年3月
43. 神宮輝夫「第二次世界大戦後の作品 Ⅱ「絵本」」猪熊葉子他編『講座日本児童文学 五』明治書院 1974年
44. 神宮輝夫「序」『光吉文庫蔵書目録』白百合女子大学児童文化研究センター 2006年
45. 神宮輝夫『児童文学のなかの子ども』日本放送出版協会 1974年
46. 加藤理編『叢書 児童文化の歴史Ⅰ』港の人 2011年
47. 径書房編集部『「ちびくろサンボ」絶版を考える』径書房 1990年
48. 川合澄男「序—復刻にあたって」『日本学芸新聞』不二出版 1986年

49. 川勝泰介『児童文化学研究序説』千手閣 1999年
50. 川勝泰介『児童文化学ことはじめ』ユーズ企画 2009年
51. 河田篤子編『光吉夏弥文庫目録』国立音楽大学附属図書館 1993年
52. 北河賢三『戦争と知識人』山川出版社 2003年
53. 小寺啓章『資料でみる石井桃子の世界』 2007年
54. 「アメリカの絵本—多文化を映し出す鏡—」国立国会図書館国際子ども図書館編『絵本の黄金時代—1920～1930年代』国立国会図書館国際子ども図書館 2010年
55. 近藤昭子「第4章〈岩波の子どもの本〉の新しさと時代による限界」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』ミネルヴァ書房 2002年
56. 鴻巣良雄「岩波書店編集部『岩波の子どもの本』」日本文学協会『日本文学』第3巻第6号 1954年6月
57. イエラ・レップマン 森本真実訳「国際児童図書展 クリスマスの三つの贈りもの」『子どもの本は世界の架け橋』こぐま社 2002年
58. 梶井孝「内務省図書課「昭和十三年 児童雑誌検閲簿」について」『国際児童文学館紀要』第12号 財団法人大阪国際児童文学館 1997年
59. 松居直「覚え書・絵本の翻訳出版」子どもの本・翻訳の歩み研究会編『子どもの本・翻訳の歩み事典』柏書房 2002年
60. 松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973年
61. 松居直『NHK 人間講座 絵本のよろこび』日本放送出版協会 2002年
62. 民間教育史料研究会編『教育科学の誕生』大月書店 1997年
63. 光吉甲義子「光吉夏弥年譜、著作・翻訳図書・評論リスト」河田篤子編『光吉夏弥文庫目録』国立音楽大学附属図書館 1993年
64. 光吉夏弥「岩波の子どもの本（一）—その発行のころのことども」『月刊絵本』盛光社 1973年5月
65. 光吉夏弥「岩波の子どもの本（二）—その発行のころのことども」『月刊絵本』盛光社 1973年6月
66. 三宅興子『イギリス絵本論』翰林書房 1994年
67. 三宅興子『イギリスの絵本の歴史』岩崎美術社 1995年
68. 三宅興子『日本における子ども絵本成立史—「こどものとも」が果たした役割』ミネルヴァ書房 1997年
69. 三宅興子『児童文学の愉楽』翰林書房 2006年
70. 宮本大人「第1章 戦時体制と絵本」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅱ』ミネルヴァ書房 2002年
71. 宮本大人「沸騰する「教育的」漫画論—「児童読物改善ニ関スル指示要綱」の通達前後」『白百合児童文化XⅢ』白百合女子大学児童文化学会（児童文学・文化専攻）2004年
72. 宮田昇『翻訳権の戦後史』みすず書房 1999年
73. 宮崎麻子「光吉夏弥—人物と子どもの本の仕事 神宮輝夫先生、澤田精一先生に聞く」

- 『白百合児童文化XIV』白百合女子大学児童文化学科 児童文学・文化専攻研究室
2005年
74. 宮崎芳彦「日中戦争期の児童文化文学と出版の構造—『児童読物改善に関する内務省指示要綱』のターゲットとイデオロギー」『白百合児童文化X』白百合女子大学児童文化学会（児童文学・文化専攻） 2000年
75. 村井実全訳解説『アメリカ教育使節団報告書』講談社 1979年
76. 永田桂子『絵本観・玩具観の変遷』高文堂出版社 1987年
77. 永田桂子『変貌する現代絵本の世界』高文堂出版社 2004年
78. 永田桂子「我が国の三歳未満児対象絵本一下限とされた年齢と理論の嚆矢」『国際児童文学館紀要』第18号 財団法人大阪国際児童文学館 2005年
79. 滑川道夫「戦時期の絵本事情」瀬田貞二・鳥越信・滑川道夫『複刻 絵本絵ばなし集解説』ほるぷ出版 1978年
80. 滑川道夫『体験的児童文学史』国土社 1993年
81. 滑川道夫「第I部 二. 出版統制過程をふりかえる」『日本児童文学の軌跡』理論社 1988年
82. 「戦後の絵本の発展〈座談会〉太田大八・佐藤英和・武市八十雄・松居直・古田足日、いぬいとみこ「紙上参加・絵本あれこれ」日本児童文学者協会編『絵本』日本児童文学臨時増刊号第17巻13号(183) 盛光社 1971年12月
83. 20世紀メディア研究所編『インテリジェンス 第10号 特集：戦争と文化財—その略奪と行方』紀伊国屋書店 2008年
84. 西田良子「絵本」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第二巻』大日本図書 1993年
85. 大藤幹夫「戦後の絵本の流れの中で」『日本児童文学』日本児童文学者協会 1968年
86. 岡田純也「児童文化財」第2節「絵本」滑川道夫他編『児童文化』東京書籍 1975年
87. 奥山恵「岩波の子どもの本」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第三巻』大日本図書 1993年
88. 定松正「光吉夏弥」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第二巻』大日本図書 1993年
89. 佐伯郁郎『少国民文化をめぐって』日本出版社 1943年
90. 佐々木宏子「日本の児童文化運動」東洋・小澤俊夫・宮下孝広編『児童文化入門』岩波書店 1996年
91. 佐藤広美『総力戦体制と教育科学—戦前教育科学研究会における「教育改革」論の研究』大月書店 1997年
92. 澤田精一「光吉夏弥さんのこと」河田篤子編『光吉夏弥文庫目録』国立音楽大学附属図書館 1993年
93. 澤田精一「日本の子どもとジョージの出会い：『ひとまねこざる』の翻訳者、光吉夏弥氏の遺した仕事」『月刊MOE』特集「キュリアス・ジョージと2001ハッピーライフ」白泉社 2001年2月

94. 灘本昌久『ちびくろサンボよ すこやかによみがえれ』径書房 1999年
95. 戦後60+1周年子どもの本・文化プロジェクト実行委員会『日米交流子どもの本・文化セミナー 歴史に学び、未来を拓く記念誌』 2007年
96. Teiji Seta, Momoko Ishii Where the Old Meets the New; The Japanese Picture Book, Lee Kingman, Grace Allen Hogarth, Harriet Quimby *Illustrations of Children's Books 1967-1976* The Horn Book, Inc. 1978
97. 瀬田貞二「英米児童文学を日本はどうとりいれたか 4. 昭和前期」瀬田貞二・猪熊葉子・神宮輝夫『英米児童文学史』研究社出版 1971年
98. 瀬田貞二『幼い子の文学』中央公論社 1980年
99. 瀬田貞二『絵本論—瀬田貞二子どもの本評論集—』福音館書店 1985年
100. 瀬田貞二『落穂ひろい日本の子どもの文化をめぐる人びと（上・下巻）』福音館書店 1982年
101. 瀬田貞二『児童文学論—瀬田貞二子どもの本評論集（上・下巻）』福音館書店 2009年
102. L. H. スミス 石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳「第八章 絵本」『児童文学論』岩波書店 1964年
103. 「特設コーナー3「絵本」がやってきた」社団法人日本国際児童図書評議会「子どもの本・翻訳の歩み展」実行委員会『子どもの本・翻訳の歩み展展示会目録』国立国会図書館 2000年
104. 社団法人日本少国民文化協会『社団法人 日本少国民文化協会要覧』1943年2月
105. 竹内オサム『児童文化と子ども学』久山社 1997年
106. 田中泰子「石井桃子さんを訪ねて」『カスチャール 16号』カスチャールの会 1998年10月
107. 谷暎子「第1章 占領下の絵本と検閲」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』ミネルヴァ書房 2002年
108. 谷暎子『占領下の児童書検閲（資料編）—プランゲ文庫・児童読み物に探る』読書新社 2004年
109. 寺崎昌男・戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育』東京大学出版会 1987年
110. 富田博之『児童文化時評一九七二～九四年』久山社 1996年
111. 鳥越信『3歳から6歳までの絵本と童謡』誠文堂新光社 1967年
112. 鳥越信「日本の絵本」100年の流れ」伊藤元雄編『日本の絵本100年展』ブック・グローブ社 2000年
113. 鳥越信「絵本随想」『学燈』丸善 1968年11月
114. 鳥越信「序—絵本を考える」鳥越信編『絵本の歴史をつくった20人』創元社 1993年
115. 鳥越信『はじめて学ぶ 日本児童文学史』ミネルヴァ書房 2001年
116. 鳥越信「序章 近代日本絵本史の起点」鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅰ』ミネルヴァ書房 2001年